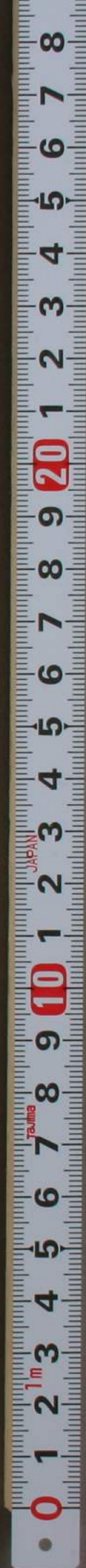


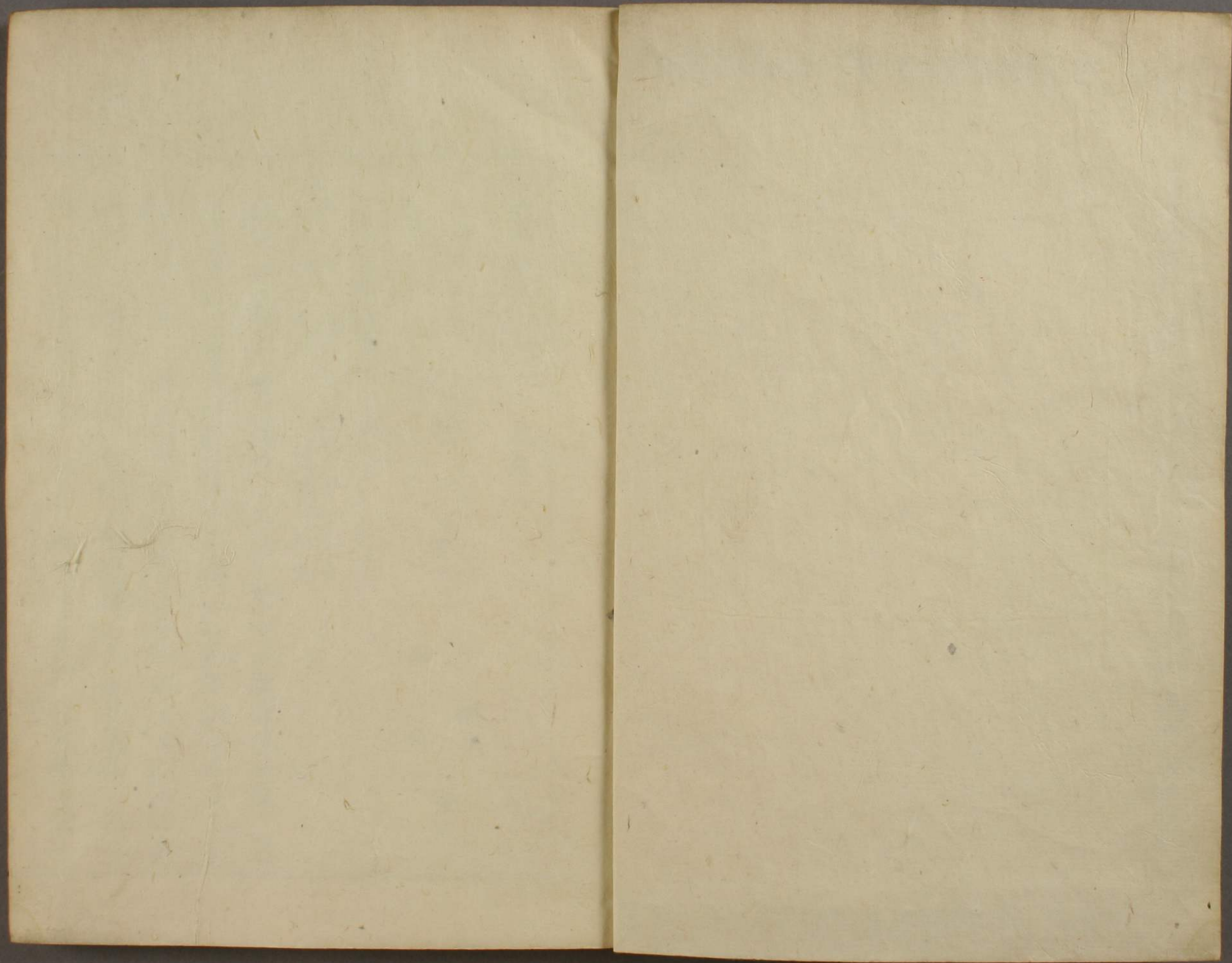
古史本辭經

三

利  
105  
3

ホ 2  
105  
3







て。其合口言れる。布流てふ言れ。出來しとてぞ。起り始ける。

此は古今ふ。波良理。波く良く。比理く。比く理く。布流理。布く良く。閉呂理。閉く良く。保呂理。保く良く。れど謂ふ。形容言れ。多うるを思ひ合せて辨ふ。然て本邑の下ふ。布良波良。ねど注せるを。其本義とる言。次々委く云ふを俟。其由を。波行篇の初章。二十五言。神典此古傳と。阿聲。

ふ波行は從牙。五言をふ。徴し。攷了てぞ所知る。は。其

波良 比良 布良 閉良 保良 二十五言此譜かく此

波理 比理 布理 閉理 保理 如し。是章ふ。第三段布

波流 比流 布流 閉流 保理 其中央。位して。其

波禮 比禮 布禮 閉禮 保禮 豎横。ま。斜。貫。通。此

波呂 比呂 布呂 閉呂 保呂 行も。三段。布流。起

抑是二

十五言は。布流と起。奮此義。ふして。布良。布理。布流。布禮。

布呂を。活々る。布良を。波と約めて。初段。居。布理を。比

と約めて。二段。居。布流を。布を締めて。素は。は。三段。居

於。布禮は。閉を約。四段。居。布呂を。保と約めて。

五段。居。是を以て。此行五聲の初義は。共。奮字。此義。

ゆ。但し。其段位。五母韻の次第。因る。既。云。る。如

奮字。説文。奮。部。小。翬也。从。奮。在。田。段。注。羽。部。曰。翬。大。飛

也。雉。雞。羊。絶。有。力。皆。曰。奮。と。見。え。他。字。書。等。羽。曲。禮。奮。衣。由

右。上。註。振。衣。塵。也。迅。也。飛。也。動。也。振。也。舒。也。揚。也。發。奮。也。と。云

也。蓋。は。是。五。色。初。義。引。用。せ。り。お。本。毎。色。各。く。此。末。義

あり。其。下。ち。て。如此。奮。字。本。義。ある。波。比。布。閉

謂。ふ。を。見。べ。し。保。は。と。各。く。ふ。良。行。の。五。聲。相。副。し。う。ば。波。を。初。段。晴。活

用と成り。比魯二段乾は活機とれり。布を素の如く。三段奮  
此活機字爲し。閉て四段減の活機を成也。保て五段摺の活  
用と成まり。此て是行は轉用せる初あり。晴を説文夕部  
夜除星見也从夕生色韻會徐曰今作晴或作暝前天文志  
天暝而景星見孟康曰暝精明也と見え乾を説文乙部上  
出也从乙乙物之達也軌色段注上出此字之本義也易釋  
之曰健也健之義生於上出上出爲乾下注則爲溼故乾與溼  
相對俗別其音古無是也とあり減を説文水部損也从水  
咸色增韻名減耗也せ見え摺は説文手部掘也从手骨色  
段注吳語夫諺曰狐狸之而狐摺之。然亦良行の五聲也。  
是以無成功章注摺發也と云り。毛を形容る機支副とる聲等れまむ其本聲於ひふたて。  
韻のみ残り。波比布閉保の單聲を齊れるぐ。一度かく良行  
此副ひて。右は音義を成せるるり。永久ふ其義を存して各

各其音ふ自然の如く。晴乾奮減摺の義を持とり。然て有れ  
ど。其て實は第二義なり。其活機の大要を云む。初  
遙おどの祖言二段乾起て。平疼畫廣形どの祖言  
三段奮ふ起りて。放零振觸おどの祖言四段減ふ起り  
て。片端綜形ど此祖言五段在坪お起りて。洞欲穿悅れど此  
祖言ある類ひ。お不轉用し出とる言ども多うり。其て本篇  
見就て。はて是五聲也。あう起る由來を。神典了稽ふるお。  
彼一物の未割れ。交漂ひて在る状態。神代紀一書。古固  
稚地稚之時。譬猶浮膏而漂蕩云。古事記。固稚如浮脂而  
久羅下那洲多陀用幣琉之時云。くと有依猶浮膏てふ譬形  
む。此行は起原を知べ。支神語れ依。神代紀一書。いほ一所  
空中。因此化神。號固常立尊と云。る文あれど。此を豫母都固  
此成也。し初災は傳ふれ。今引出べ。如文お非。古史傳を

見て知る。いで其由をばい。浮膏とは。浮雲浮草れど云類の名  
ふて。物に脂の水。浮る。我謂ふ。和名抄ふ。脂膏油ふと云。  
阿布良と訓。免り。名義。阿は例に指。嘆れ。依聲。ふて。彼の義  
ある。我思ふ。乃彼奮て。ふ言あり。阿布良の水。ふ浮る。様  
誰も見て。知れる。が如し。はと。溢字を。阿布良の。水。ふ浮る。様  
アブルと。訓む。も。是。と。り。轉。出。と。る。言。あり。本。篇。を。見。て。知  
る。然。れ。む。此。傳。を。天。地。を。成。る。死。彼。一。物。の。ふ。初。と。く。稚  
く。在。り。も。遂。に。開。支。割。る。べき。活。發。字。含。み。て。布。と。流。と  
奮。免。死。布。と。良。く。布。と。理。と。在。る。状。字。目。前。に。見。行。せ。依。  
神。に。御。心。ふ。と。う。所。思。看。せ。依。隨。り。其。象。を。大。御。言。ふ。詔。ひ。形  
は。し。賜。へ。る。ぐ。右。に。古。傳。の。發。出。と。る。初。り。て。即。是。五。聲。に。元

基。と。ハ。爲。ま。す。其。右。に。古。傳。は。と。當。昔。と。有。る。様。を。正  
じ。死。謂。ぬ。る。と。上。の。條。に。論。ず。る。説。等。ふ。思。ひ。合。は。べ。し。  
但。し。膏。脂。を。給。ひ。し。神。は。良。と。云。ふ。言。は。素。と。り。有。り。て。此。傳。を  
語。り。始。め。給。ひ。し。神。は。良。と。詔。ひ。し。が。膏。油。の。状。を。其。物。の  
有。状。を。指。し。て。彼。夫。良。と。詔。ひ。し。が。膏。油。の。状。を。其。物。の  
似。と。る。故。に。其。傳。と。あ。れ。る。後。に。此。物。を。以。て。譬。を。添  
ふる。事。勿。ま。抑。其。元。基。の。然。依。所。以。に。阿。聲。に。波。行。の。從。子。依。五  
言。に。因。て。ぞ。所。知。る。依。其。に。阿。行。篇。第。六。章。に。初。段。ある。阿。波  
阿。比。阿。布。阿。閉。阿。保。此。五。言。是。あり。阿。を。皆。例。の。指。聲。り。て。彼  
に。義。取。る。字。上。件。の。二。十。五。言。を。相。照。し。攷。ふ。依。り。初。言。に。阿  
波。と。淡。の。義。あ。れ。ば。此。は。彼。一。物。の。布。と。流。と。布。と。良。と。在  
る。我。指。して。阿。布。良。と。詔。せ。依。我。其。物。已。分。り。て。精。妙。取。る



汎し。其々阿、色はも凡て指とる事物の無ては決て出さ  
 依色形るふ彼阿波を依り彼奮を以てかくい謂ふ形り  
 其を指とる所ありて起れる言形るを以てかくい謂ふ形り  
 五言此阿波各姑く指色長行の五色成を牙彼波理波流おどの  
 活用かし候試みても知るべき形也。○はる上件也。此行五  
 聲の起原はと各音ふ一義を持と依都較の説あるが亦同  
 行互了。音義相通ふ事此有るは彼二十五言此横五段豎五  
 行小整了る上ふて。初行の五言を共了波成り。第二行の  
 五言を共ふ比とれり。第三行此五言は共了布と形り。第四  
 行此五言は共了閉成也。第五行の五言は共了保成り  
 了る因る事形り。故是を以て同行あるがひぬ其音此相通ふ  
 易る言あり其此一色のみふ非抑是行此五聲か彼二  
 更比布閉保も共了此れ趣あり

十五言此混錯りて調了るが故了。今しも一義を執ては決  
 免難支ふ似あるまど。其中小就て波の主あるを晴の義もて  
 布良波良此約也。比此主と依を乾此義もて。布理比理此約  
 也。布を奮の義素もて。上下四音此義を持ち。閉此主とる也。  
 減此義もて。布禮閉禮の約り。保此主あるは。摺の義もて。布  
 呂保呂此約として。各其上下冠する四十五言。各其下  
 尔從了る五十言。共此義も差ふ事あり。各其上下冠れ  
 波比布閉保を頭了冠れる言此各四十五言。波比布閉保の下  
 謂ひ各其下尔從了冠れる言此各四十五言。波比布閉保の下  
 了る言此各五十言。波比布閉保の下尔從了冠れる言此各  
 の條波行の所了云るが如し。斯て其四十五言を古言活用  
 は此行五色此機也。依祖言形るが猶是をり轉用假借し出  
 とる諸言を更あり。他言了るも切りて此行の五色と成也



るははと自然に其義を生せり其本編に次く釋以て行くを見て知るを以て此五聲はも麻行と同ぶく唇を起れるが唇は元より輕含たる所なる波行を其内邊に柔を觸まで出た聲等れる故に其音象自然に其趣を聞えて右に如く五義を別して晴乾奮減措を此顯に立ち奮の幽字主して言靈の幸成爲こぞ例の如し其右二十五言は譜を更あり本篇每章に二十五言もみ彼行を剛に起りて易に如く此行を柔に起りて含の如き謂あり是をもて波麻は二行は表裡の如く夫婦は如く小縣居大人は早く教を遺れざるが如しはて其音象は隨に波を初段に在りて含み初まる音成爲し比を二段に居て含み定むる音を爲し布は三段に在りて含み用ふる音成

爲し閉を四段に居て含み令ける音成なり保を五段に在りて含み終る音を爲せり五色共は奮字の義を持するは初色の父を稟する色ある各初定用令終る音は別るを五母韻に受ある音質あることを上は如く彼固辭解し波は事をけし含む言比を事成含み置く言布を事をれは含む言閉を事を置き押ふる言かく保を事を含み治むる言を云り此も理をよる説ありかくて此五聲は語上に在りて語下を扱きて活用あり其連聲は因りて義の轉に變りほと或は上省り下省りて各一此言と成れるも少く其を此所不盡し難々れは是聲ども此出依諸章に因りて釋辨ふる成見て知るを  
麻 牟良美理牟流 米牟礼毛牟呂  
麻良美理牟流 米礼毛呂  
是行は五聲を日文傳に云依如く唇外は剛音其父聲と爲

め。阿行の五聲其母韻と爲りて。齊へる聲等れるが。其音象  
 戎。按ふ。麻を麻良理と志する聲。美を美理と志する聲。  
 牟を牟流理と志する聲。米を米禮理と志する聲。毛は毛呂  
 理と志する聲。此れ五聲也。其ふかく良行は五聲也。此形象戎助  
 て。其合口言なる。牟流てふ言の。出來しとゆぞ。起り初る。依  
 此を古今の麻、呂、美、理、牟、理、米、理、毛、理  
 理れど謂ふ類の形容言此多るを思ひ通して如此を謂  
 ふあり。然て本音此下牟良麻良形と注せるは。然るは麻  
 其本義とる言等あり。其由を下牟云ふを俟べし。然るは麻  
 行篇此初章形依。二十五言戎神典此古傳と。阿聲小麻行の  
 從牙依五言也。小徴し攷了て是戎知れゆは。其二十五言  
 此譜かく此如し。是章第三段牟流の合口言なるが其家  
 中六位して其豎横はと斜小貫通する趣

麻良	美良	牟良	米良	毛良	<small>よ。意字潜めて此行も 三段牟流より起れる</small>
麻理	美理	牟理	米理	毛理	<small>所以字は抑此二十 心得居るし</small>
麻流	美流	牟流	米流	毛流	<small>五言は牟流より起り</small>
麻禮	美禮	牟禮	米禮	毛禮	<small>聚此義小して牟良牟</small>
麻呂	美呂	牟呂	米呂	毛呂	<small>理牟流牟禮牟呂也活</small>

依る。牟良を麻と約りて。初段小居り。牟理を美と約りて。  
 二段小居り。牟流は牟と締りて。素はは。三段小居り。牟  
 禮を米と約りて。四段小居り。牟呂を毛と約りて。五段小居  
 依。是字以て。此行五聲此初義を共ふ聚字此義あり。但し其  
 段位を五母韻の次第小循ふことを例の如し。聚字を説文从  
 部小會也邑落

曰聚段注。邑落謂邑中村落。といひ。他書ふた。衆也とも見  
也。聚散屯聚。ふど熟語して。何ふほき。群集ふ意。用ふる字  
あり。蓋ふた。此五邑の初義。ふた。そ有れ。あ。布。ちて。如此。ふ  
毎邑各く。此末義あり。其た。下ふ云。を見。ふ。し。て。如。此。ふ  
て。聚字。此本義。形る。麻美牟米毛。ふ。は。各く。ふ。良行の五聲  
相副し。う。ば。麻。を。初段。圓の活機と成。美は二段。滿。の活用  
を。形。正。牟。を。素。此。如。く。三段。聚。の活用。字。爲。し。米。を。四段。乙。の  
活機と成。め。毛。は。五段。盛。の活機と成。ま。ゆ。是。ぞ。此。行。に。轉。用  
せる。初。ある。圓。字。を。說。文。口。部。ふ。天。體。也。从。口。覆。邑。段。注。ふ。呂  
周。復。襍。無。所。替。留。故。曰。天。道。圓。許。言。天。體。亦。謂。其。體。一。氣。循。環  
無。始。無。終。非。謂。其。形。渾。圓。也。今。字。多。作。方。圓。方。員。方。圓。依。許。則  
言。天。當。作。圓。言。平。圓。當。作。圓。言。渾。圓。當。作。圓。と。見。え。滿。を。同。書  
水。部。ふ。盈。溢。也。佗。字。書。等。ふ。充。也。足。也。實。也。れ。ぞ。あり。乙。は。說  
文。乙。部。ふ。象。舂。艸。木。冤。曲。而。出。會。氣。尚。彊。其。出。乙。也。段。注。ふ  
乙。く。難。出。之。兒。物。之。出。土。難。屯。如。車。之。輓。地。澁。滯。と。云。正。公。家

ふて。裝束を次第ふ。忒らし。着。ま。る。戎。米。良。須。と。云。ひ。て。退。字  
を。用。ひ。樂。家。ふ。音。の。輕。重。上。下。ふ。甲。乙。の。字。を。填。て。加。理。米。理  
と。訓。こ。と。能。く。叶。牙。り。盛。を。說。文。皿。部。ふ。黍。稷。在。器。中。曰。配。者  
也。段。註。ふ。盛。者。實。於。器。中。之。名。也。引。伸。爲。凡。豐。滿。之。稱。字。彙。ふ  
茂。也。大。也。長。也。多。也。然。依。ふ。良。行。の。五。聲。を。を。形。容。と。り。機。文  
也。れ。ぞ。見。え。と。り。然。依。ふ。良。行。の。五。聲。を。を。形。容。と。り。機。文  
副。牙。る。聲。等。お。れ。む。其。本。聲。お。ひ。ふ。忒。て。韻。の。み。殘。正。麻。美。牟  
米。毛。此。單。聲。と。齊。れる。ぐ。一。度。加。く。良。行。此。副。ひ。て。右。の。音。義  
を。成。せ。ゆ。と。り。永。久。子。其。義。を。存。し。て。各。く。其。音。小。自然。此。如  
く。圓。滿。聚。乙。盛。の。義。字。持。と。り。然。れ。ど。其。を。此。行。の。第。二。義。お  
正。今。其。活。機。の。大。要。を。云。む。初。段。を。圓。ふ。起。り。て。餘。圓。希。九  
也。お。ど。の。祖。言。お。る。ぐ。麻。の。一。音。は。眞。の。義。よ。て。間。を。訓。む。も  
同。義。れ。り。二。段。を。滿。此。活。機。の。一。音。は。眞。の。義。よ。て。間。を。訓。む。も  
理。と。拆。る。お。ど。謂。ふ。美。理。ふ。て。美。此。一。音。を。實。の。義。お。る。ぐ。御  
見。字。訓。む。も。是。と。り。出。る。正。三。段。を。聚。子。起。正。て。村。叢。群。室。御  
ど。の。祖。言。お。る。ぐ。牟。の。一。音。を。聚。の。義。お。て。身。を。訓。む。も。同。義

あり。四段をひき起り、米流、米理、米良、志と活きて、退字をも  
訓え、米は一音は芽、此義あるが、目、女、字訓むも、同義あり、五  
段を諸不起りて、洩守、盛れど、祖言、形、毛、の、一音は、茂  
の義、み、て、此を、説文、小、艸、木、盛、兒、と、見、え、爾、雅、不、如、松、柏、曰、茂  
注、小、言、杖、疎、茂、盛、也、と、有、れ、ど、此、を、其、字、音、を、用、ふ、る、非  
之、書、紀、小、杖、疎、字、ハ、モ、モ、と、訓、る、は、繁、茂、を、用、ふ、る、非  
モ、キ、と、訓、る、も、古、言、を、ま、は、す、是、を、據、れ、り、昔、も、説、文、小、艸、多、兒  
詩、曰、蒼、兮、蔚、兮、と、有、る、段、注、小、詩、曹、風、文、毛、傳、曰、蒼、蔚、雲、興、兒  
引、伸、為、凡、物、會、萃、は、て、此、五、聲、の、然、起、れ、る、由、來、を、神、典、亦、誓  
之、義、と、見、え、と、り、  
ふ、依、了、既、引、ある、神、代、紀、正、書、小、古、天、地、未、剖、會、易、不、分、渾  
沌、如、雞、子、云、く、同、じ、一、書、也、天、地、混、成、之、時、始、有、神、人、焉、云、く、  
ぞ、有、依、渾、沌、混、成、了、傍、と、依、古、訓、也、牟、良、加、禮、を、聚、加、禮、麻、呂  
加、禮、を、圓、加、禮、也、牟、良、麻、呂、共、了、右、譜、中、此、言、れ、る、哉、先、思  
ふ、也、し、此、を、牟、良、加、禮、麻、呂、加、禮、と、訓、る、加、禮、ハ、聚、禰、圓、禰、と  
い、ふ、禰、の、延、ある、詞、ある、が、然、延、ま、む、乃、か、の、加、行、也

譜の、加、理、加、流、加、礼、の、義、を、成、せ、り、然、て、右、神、代、紀、正、書、の、文  
を、漢、籍、三、五、曆、紀、此、文、を、採、れ、る、れ、ま、ど、其、事、を、元、を、り、皇、國  
也、古、傳、形、る、こ、と、上、小、抑、是、傳、也、上、了、云、依、如、く、天、地、と、剖、る  
も、既、小、云、る、が、ま、ま、し、抑、是、傳、也、上、了、云、依、如、く、天、地、と、剖、る  
ま、ま、し、一、物、の、未、分、れ、混、一、在、了、し、間、此、傳、あ、れ、也、其、物、の  
渾、沌、と、る、状、也、牟、良、流、く、を、聚、の、り、牟、良、良、く、麻、呂、く、を、在  
り、依、象、を、目、前、了、御、覽、せ、る、神、此、御、情、了、志、の、所、思、看、せ、る、隨  
也、其、様、字、大、御、言、小、詔、ひ、形、は、し、給、了、依、り、右、の、古、傳、此、發、出  
多、依、初、也、即、是、五、聲、の、元、基、と、ハ、為、れ、り、其、は、右、の、古、傳、は  
る、状、を、正、目、見、行、せ、る、神、あ、ら、で、た、語、也、始、免、給、ふ、は、じ、き  
道、理、形、る、こ、と、上、此、件、を、論、了、説、等、小、思、合、せ、て、知、べ、し  
い、で、其、元、基、の、然、る、所、以、也、阿、聲、也、麻、行、の、從、へ、る、五、言、小、因、  
て、ぞ、所、知、也、其、也、阿、行、篇、第、七、章、此、初、段、也、依、阿、麻、阿、美、阿

牟阿米阿毛の五言是あり。阿を皆例に指聲ふて。彼に義を  
 依字。上件に二十五言を相照し。攷ふ。初言の阿麻ハ。天  
 此義をまむ。此を彼一物に。牟と流く。牟と良くと在依字指  
 して。阿牟良と詔せ依哉。其物判りて。清易なり。天霰と薄  
 靡く。小聚く。せして。混成。阿周まる。故。阿牟良やぐて其言  
 や爲。良に開音。因りて阿麻と約。彼譜の初段亦依麻  
 良麻理麻流麻禮麻呂の活機字なり。阿牟良を乃彼聚の義  
 と爲ては。彼圓の義をれし。其を一。字訓。了。綜。ては。天はと阿麻  
 の義。了。餘。り。餘。る。餘。れ。餘。ら。む。と。活。用。く。を。謂。ふ。あり。但。し  
 餘。を。麻。理。と。云。ふ。を。人。の。活。る。る。阿。麻。理。の。阿。を。去。る。言。と。思。ふ。べ  
 尿。れ。ど。此。を。も。と。圓。の。活。る。る。阿。麻。理。の。阿。を。却。て。添。と。る。言。あり。  
 同。じ。本。篇。を。見。て。知。る。し。け。て。阿。麻。良。は。阿。麻。を。約。す。阿。麻。理。

は阿美と於まり。阿麻流を阿牟と於ほり。阿麻禮は阿米と  
 約す。阿麻呂を阿毛と約す。阿は活機ある。阿を素とり  
 天餘と同言れ。其に此。天空。上。件。に。如。く。成。竟。と。依。物。お。は  
 有れ。亦。元。と。り。其。中。に。寂。莫。ふ。して。動。を。移。ら。す。其。本。於  
 眞洞。れ。る。域。あり。其。中。に。所。を。乃。謂。ゆ。乃。謂。ゆ。天。極。紫。微。宮。に  
 是。域。乃。天。に。本。綱。に。依。り。是。を。り。堅。横。す。五  
 百。綱。千。綱。字。引。延。と。る。如。く。圓。く。を。向。伏。し。餘。り。編。成。れ。る。物  
 あり。て。天。空。や。ぐ。て。世。界。に。大。綱。ある。義。なり。故。是。を。以。て。古。語  
 了。此。を。都。て。高。天。原。と。稱。す。其。を。今。見。放。る。如。く。阿。目。に。由  
 彌。廣。し。張。餘。す。於。原。に。して。瞻。を。れ。筈。に。也。天。を。説。文。に。顯  
 也。至。高。無。上。从。

一大段注を至高無上。是其大無有二也。故从一大於六書為  
會意。網。同書。網。作。りて。庖犧氏。所。結。繩。曰。田。曰。魚。也。从  
門。下。象。網。交。文。段。注。了。門。冪。其。上。也。从。象。網。目。文。也。ひ。は。と  
罔。ト。作。て。罔。或。加。亡。と。云。正。然。れ。バ。網。の。本。字。を。罔。あ。る。を。  
後。了。て。罔。お。作。り。後。ま。と。網。お。作。る。者。罔。は。同。書。了。罔。を。  
也。从。糸。罔。色。段。注。お。紘。繩。也。孔。穎。達。云。紘。者。罔。之。大。繩。商。書。曰。  
若。罔。在。罔。有。條。而。不。紊。と。見。え。さ。り。万。葉。九。石。川。年。足。朝。臣。  
新。嘗。會。の。祝。哥。お。天。お。は。も。五。百。都。綱。は。ふ。万。世。了。罔。知。さ。む。  
と。五。百。都。綱。は。ふ。と。詠。れ。し。と。此。古。義。了。想。ひ。合。は。ま。し。彼。老。子。  
此。書。お。天。網。恢。く。疎。而。不。失。と。云。る。も。今。は。俗。語。お。天。の。網。は。  
罹。る。れ。と。云。ふ。思。ひ。合。さ。ゆ。然。て。其。天。網。の。本。網。を。即。ち。の。  
中央。紫。微。垣。内。か。の。天。極。星。の。所。在。ぬ。其。網。の。本。網。を。即。ち。の。  
字。高。天。原。と。云。ひ。遂。ふ。て。天。照。大。御。神。の。所。知。看。は。天。日。然。  
御。罔。を。も。稱。ふ。言。と。あ。ま。り。委。く。古。史。傳。を。見。て。知。は。し。然。  
れ。を。阿。聲。ふ。麻。行。の。從。へ。依。五。言。を。彼。譜。の。初。行。ぬ。麻。良。美  
良。牟。良。米。良。毛。良。は。活。用。せ。ハ。其。元。一。ふ。し。て。彼。聚。と。指。と。る  
言。は。活。機。ぬ。し。ぐ。阿。麻。阿。美。ぬ。ぞ。の。五。言。を。其。副。ぬ。依。良。聲

の。本。れる。言。麻。良。美。良。等。は。二。十。五。言。を。其。冠。と。る。阿。聲。の。省  
か。ゆ。齊。了。る。言。等。ふ。て。共。了。右。の。古。傳。を。詔。ひ。出。ぬ。依。當。初。は  
神。語。ぬ。る。こ。を。疑。ぬ。し。然。る。は。阿。色。は。も。凡。て。指。と。る。事。物。の  
麻。を。彼。聚。と。指。と。る。物。あり。彼。圓。と。指。と。る。所。あり。て。起。れ。る  
言。ある。以。て。加。く。て。謂。ふ。お。り。其。を。阿。麻。の。一。言。お。姑。く。良  
行。の。五。色。を。そ。了。彼。麻。理。麻。流。ぬ。の。五。言。了。仮。お。各。く。○。は  
指。色。は。阿。を。冠。ら。し。活。用。し。呼。試。も。知。る。き。ぬ。り。○。は  
て。上。件。を。此。行。五。聲。は。起。原。は。と。各。音。お。一。義。を。持。ぬ。る。較。畧  
は。説。ある。ぐ。亦。同。行。互。了。音。義。相。通。ふ。事。は。有。る。を。彼。二。十。五  
言。の。横。五。段。豎。五。行。を。整。了。る。上。ふ。て。初。行。の。五。言。は。共。了。麻  
と。成。り。第。二。行。の。五。言。を。共。了。美。ぬ。れ。也。第。三。行。は。五。言。を。共  
了。牟。と。成。り。第。四。行。は。五。言。は。共。了。米。ぬ。れ。也。第。五。行。は。五。言

は共了毛と成れるふ因依事あり。故是を以て同行とがひ  
交麻と呼ぶ色を一よして其義の易事あり其を此抑是  
一色のみ然るふ非交美年米毛も共ふれおじ趣あり抑是  
行の五聲もかく右二十五言此混錯して調了るが故了今  
しも一義を執て是決然難ぶる似とれど其中就て麻の  
主あるは園此義あり年良麻良此約り美此主と依を満此  
義あり年理美理の約り年此主とるを聚の義素あり上下  
の四義を包れ米此主とるを乙此義あり年禮米禮の約り  
毛此主あるを諸の義あり年呂毛呂の約りとして各其上  
了冠れ依四十五言各其下下從了る五十言共了此義あり  
差ふ事あり各其冠る言の各四十五言とハ麻美年米毛  
を頭よ冠る言の各四十五言とハ麻美年米毛

謂ひ各其下下從へる五十言とハ麻美年米毛の下下從  
了る言の各五十言有るを云ふ此を既了古言活用此條  
麻行此所云るが如し斯て此四十五言と五十言とハ是  
行五色此機は祖言あり其切り轉用假借し出さる  
諸言を更あり他言あり其切り此行の五色と成然るも  
はと自然了其義を生せり其本篇より次く釈以て行くを  
見て知ちて此五聲はも波行と同ぶく脣ふ起れるが脣を  
元とめ剛ふ實満ありと柔ふ輕含久依と相兼ふ依所あり  
此行を其剛ふ實満ある方より發れる聲等あるを其音象  
自然了其趣了聞えて右此如く五義ふ別り園満聚乙盛そ  
此顯ふ立ち聚そ此幽を主りて言靈此幸殘爲こと上小同  
じ。其右二十五言の譜を更形り本篇各章の二十五言も  
み此例に差ふ事あり然て此五色ふ濁音あり其濁音  
を波行の濁音あり兼れられ波麻二行此會易けちて其音  
表裡此如く相離さる依所以も是ふて知るべし

象の隨う。麻を初段に在りて。滿初むる音を爲し。美は二段  
 小居て。滿定むる音成れし。牟は三段に在りて。滿用ふる音  
 を爲し。米を四段に居て。滿今去依音成爲し。毛を五段に在  
 りて。滿終る音を爲せり。五色共う。聚字の義を持するは初  
 令終ふ。音此別依ハ五母韻の父は稟とる色。また各初定用  
 如し。彼因辭解。麻を事を指滿とる言。美を事を滿し。備ふ  
 る言。牟を事を備ふ。滿る言。米を事を備ふ。然る言。毛を  
 事を滿らし。納むる言。と云。牙依は実。然る言。毛を  
 えて此五聲の語上は在り。語下は扱て。活機を扱。其連  
 聲は因りて。義は轉り易り。はと或を上省り。下省りて。各  
 各一聲は言と爲れるも少うら。其を此所へ盡し難れ  
 ぬ。是聲どもは出依諸章の。因くは釋辨ふる成見る法し。

夜ヤ由良ユ以ユ以ユ理リ由ユ流ル曳エ由禮ユ余ヨ由呂ユ  
 此行の五聲を。日文傳り云依如く。謂ゆる半喉音にして。五  
 母韻は頭。各く伊聲冠ひて。成れる聲等れる。其音象を  
 按ふ。夜を夜良理とある聲。以を以理くとある聲。由  
 を由流理とある聲。曳を曳禮理とある聲。余を余呂理  
 とある聲。共ふかく良行の五聲。その形象を助けて。  
 例は合口言れる。由流てふ言は出來しとゆぞ起り初。け依。  
 此を古今ふ。由良理由く良。夜良理以く良。由流理由く  
 流く。曳良理曳く良。余呂理余く呂。然れど謂ふ類の形容  
 言は多るを思ひ合せて辨ふ。然て本音は下ふ。由良  
 夜良れど注せるは。其本義とる言あり。次は委く云ふを俟  
 し。其由を。夜行篇の初章ある。二十五言を。神典は古傳と。阿



聲ヤ夜行の從子依五言ヤをフ徴カし攷カりてレぞ所知レる依マの  
 夜良 以良 由良 曳良 余良 其二十五言此譜か  
 夜理 以理 由理 曳理 余理 其二十五言此譜か  
 夜流 以流 由流 曳流 余流 其二十五言此譜か  
 夜禮 以禮 由禮 曳禮 余禮 其二十五言此譜か  
 夜呂 以呂 由呂 曳呂 余呂 其二十五言此譜か  
 二十五言はユ由流ルをユ起オす動ルの義ルしてユ由良ル由理ル由流ル由  
 禮ル由呂ルをタ活タけるグ由良ルをヤ夜と約ソめてユ初段ル居セ由理ルを  
 以ト約メてユ二段ル居セ由流ルはユ由と締ヒてユ素モはオく三段  
 居セ由禮ルをエ曳ト約メてユ四段ル居セ由呂ルはユ余と約メて


て五段ル居セ是を以て此行五聲の初義を共了動字此義  
 あり但し其段位を五母韵此次第小因るこを上の如し動  
は説文力部作也と見え段注作者起也と云ひ他の字  
書等静之對也出也搖也振也周礼九拜四曰振動以兩手  
相擊蓋古之遺法也ト何レ動搖共レて如此カなるレ動字此  
ハ皇朝ハ古ク由流具を訓來キりレて如此カなるレ動字此  
 義を起れる夜ハ由ユ曳エ余ヨはト各クハ良行の五聲相副  
 しうば夜ハ初段遣ハの活用ハと成り以テ二段ハ苛ハ活機ハ也  
 也ハ由ハ素ハ比ハ如ク三段動ハの活用ハを爲シ曳ハ四段ハ擇ハ活機ハ  
 と成り余ハ五段宜ハ活機と成れり此は是行の轉用せる  
 初ハ也遣ハ字ハ説文走部縦也段注ハ糸部縦緩也一曰  
 遣の義ハあり苛ハ説文艸部小艸也段注ハ引伸ハ為凡瑣碎  
 之稱ハ字彙ハ政令ハ繁細ハ曰苛政ハ又ハ虐也ハ急也ハ煩也ハ怒也ハ察也ハ楊

慎云奇、小草也。今但知為奇、刻之奇、と見え、擇を説文手部、  
東、選也。段注、東者分別簡之也。簡者存也。選、下曰選遣也。一  
曰擇也。と見え、寄を説文、部、部、部、託也。段注、字从奇、奇、異也。  
言部、曰託寄也。韵會、廣韵、附也。增韵、又寓也。傳也。れと見え  
ゆ、然、依、尔、良、行、此、五、聲、を、を、を、形、容、を、ゆ、機、を、副、る、聲、等、を  
れ、む、其、本、聲、を、ひ、ふ、た、て、韻、の、み、残、り、夜、以、由、曳、余、の、單、聲、と  
齊、れ、る、が、一、度、か、く、良、行、此、副、ひ、て、右、此、音、義、を、成、せ、る、と、ゆ、  
永、久、不、其、義、を、存、し、て、各、く、其、音、を、自、然、の、如、く、遣、奇、動、擇、寄  
此、義、を、持、と、ゆ、然、れ、ど、其、此、行、の、第、二、義、を、也、前六行の例  
其、活、用、の、大、要、を、述、ぶ、き、あ、れ、ど、此、行、は、以、曳、を、阿、行、は、伊、  
延、と、相、似、て、互、に、胡、乱、し、死、事、あ、り、故、其、別、を、下、に、云、む、と、あ、  
洩、せ、り、は、て、是、五、聲、は、あ、り、起、れ、る、由、來、哉、神、典、了、稽、ふ、依、よ、  
此、を、上、件、く、此、如、き、諦、し、此、神、語、を、有、こ、を、無、れ、ど、上、に、准、す

て、是、を、按、ふ、る、此、は、彼、一、物、の、海、月、れ、は、久、く、良、く、と、漂、ひ、浮、  
膏、れ、を、布、く、良、く、と、奮、と、依、状、れ、ま、と、由、く、流、く、を、動、久、き、由、  
由、良、く、由、く、呂、く、や、も、見、え、ら、む、字、然、る、象、を、見、行、し、坐、せ、依、  
神、の、御、心、了、あ、り、所、思、看、に、隨、了、其、様、を、大、御、言、ふ、詔、ひ、形、は、  
し、賜、予、る、が、此、行、五、聲、の、元、基、と、爲、れ、る、を、を、疑、れ、し、此、を、極  
臆、度、の、如、あ、れ、ど、は、と、決、然、て、此、行、は、か、く、起、ま、る、こ、其、由、良、  
せ、上、件、く、此、由、來、を、し、平、心、に、按、ひ、合、せ、て、悟、依、を、し、其、由、良、  
を、神、典、了、天、皇、祖、神、の、饒、速、日、命、を、十、種、の、神、寶、を、授、け、賜、ふ、  
時、此、大、御、言、ふ、布、留、倍、由、く、良、く、止、布、留、倍、と、有、依、由、く、良、く、  
是、を、て、布、留、倍、を、可、振、と、謂、ふ、言、れ、り、由、流、を、を、神、を、幣、束、奉、  
依、ふ、左、右、左、右、を、振、依、趣、れ、る、哉、謂、予、ゆ、布、流、を、由、流、と、元  
を、ゆ、同、義、の、言、あ、り、



云、を始、発、奇、し、怪、み、阿、夜、ウ、ウ、危、し、愆、也、阿、夜、か、し、邊、ち、然、れ、  
 阿、夜、ゆ、ゆ、擲、也、れ、と、種、く、ふ、活、ル、ゆ、本、篇、を、見、て、知、べ、し、然、れ、  
 尤、阿、聲、ふ、夜、行、け、從、へ、る、五、言、と、彼、譜、に、初、行、け、る、夜、良、以、良、  
 由、良、曳、良、余、良、の、活、用、也、ハ、其、元、一、ふ、して、彼、動、と、指、と、依、言、  
 此、活、機、也、と、い、う、阿、夜、阿、以、那、ど、の、五、言、を、其、副、多、る、良、聲、の、  
 忒、れ、る、言、夜、良、以、良、等、此、二、十、五、言、は、其、冠、と、名、阿、聲、此、省、の、  
 ゆ、齊、へ、る、言、等、也、て、共、ふ、右、よ、論、ふ、大、御、言、の、也、し、當、初、純、神、  
 語、亦、依、ま、せ、疑、れ、し、其、阿、色、は、も、凡、て、指、と、る、事、物、の、無、て、  
 動、と、指、と、る、物、あり、彼、遣、せ、指、嘆、る、言、の、依、を、以、て、か、く、は、  
 云、れ、ゆ、其、阿、夜、の、一、言、也、姑、く、良、行、の、五、色、を、そ、す、彼、夜、理、  
 夜、流、れ、ど、の、五、言、も、各、く、指、色、此、阿、字、○、け、て、上、件、此、説、  
 冠、ら、し、活、用、か、し、呼、試、み、て、も、知、る、死、也、○、け、て、上、件、此、説、  
 等、は、此、行、五、聲、此、起、原、は、と、各、音、ふ、一、義、を、持、多、る、都、較、の、説、

那、る、が、然、し、も、全、く、調、ひ、竟、と、依、事、を、喉、音、三、行、に、論、ぶ、圖、せ、  
 依、如、く、ふ、て、實、ふ、を、阿、行、の、五、聲、よ、伊、聲、に、冠、と、る、拗、音、也、ゆ、  
 故、是、を、以、て、其、音、と、れ、自、然、也、苛、ち、進、之、壯、を、依、意、象、也、也、其、  
 は、依、於、由、良、此、夜、と、變、依、ふ、良、聲、の、韵、れ、る、阿、に、圓、滿、あ、る、が、  
 殘、り、て、其、根、韵、と、成、た、ま、せ、其、初、音、伊、を、依、が、故、也、先、窄、み、て、  
 譬、へ、む、 茹、矢、と、云、物、の、形、也、想、ひ、像、る、聲、也、是、を、  
 以、て、弓、箭、の、箭、字、夜、也、云、を、更、ふ、り、氣、進、之、尋、ぬ、る、言、也、も、成、  
 也、て、其、方、ふ、は、耶、哉、歟、乎、れ、ど、純、字、を、訓、み、來、也、尚、種、く、此、活、  
 用、を、爲、せ、り、其、和、訓、某、也、或、を、語、の、辞、と、云、也、哉、多、嘆、の、  
 草、れ、ま、や、の、類、也、り、或、を、や、と、留、り、て、や、は、の、意、れ、る、あ、り、消、  
 び、を、有、と、も、花、と、見、は、し、や、光、の、は、る、も、我、や、忘、る、此、類、也、

唯しや。そら。ゆ。緩。あり。う。は。疑。の。詞。は。下。ふ。あり。や。疑  
ふ。詞。の上。う。何。也。春。や。や。花。や。花。そ。夜。や。闇。き。道。や。惑。牙  
る。此。類。あり。ほ。と。花。も。み。ち。雪。や。氷。あ。ど。云。は。花。と。紅。葉。雪。と  
水。や。此。意。れ。也。ま。あ。葛。城。や。高。天。比。山。更。科。や。残。ぼ。ま。て。山。大  
原。や。を。し。不。の。山。あ。ど。ハ。近。ま。を。取。合。せ。て。む。故。う。や。と。切  
さ。ゆ。近。江。比。や。鏡。比。山。と。云。る。も。多。近。江。の。鏡。比。山。あ。れ。ど  
至。也。て。輕。ま。あ。ゆ。と。云。る。が。如。し。か。く。の。類。あ。り。種。然。依。て。ほ  
種。あり。然。れ。ど。此。を。み。ふ。歌。詞。は。う。牙。の。議。ふ。ま。そ。然。依。て。ほ  
於。今。世。尔。太。刀。う。死。予。也。け。或。弓。射。る。時。ふ。ど。氣。勢。を。發。し  
て。高。く。や。あ。と。聲。を。揚。る。を。矢。聲。と。も。遣。聲。と。も。謂。ふ。此。皇  
極。天。皇。紀。小。中。大。兄。皇。子。比。蘇。我。入。鹿。を。殺。し。給。ふ。所。也。曰。吐  
嗟。即。共。子。麻。呂。等。出。其。不。意。以。劍。傷。割。入。鹿。頭。肩。云。く。少。有。依  
吐。嗟。乃。是。尔。夜。比。一。聲。小。阿。の。韵。そ。此。力。を。副。て。驚。せ。る。聲  
也。也。今。本。此。吐。嗟。の。左。旁。は。ほ。と。ア。ヤ。ト。宣。と。も。有。る。は。か。く  
も。訓。を。き。由。あ。れ。ど。ア。ヤ。と。云。て。ハ。只。了。驚。死。奇。と。む。也。

と。れ。ゆ。て。此。は。叶。は。ざ。る。を。ヤ。ア。ふ。て。は。其。力。い。を。強。し。呼。試  
こ。て。知。る。し。他。説。ふ。此。吐。嗟。を。發。語。の。辞。ア。ハ。ヤ。の。響。あ。ゆ。と  
云。る。も。有。れ。ど。後。あ。の。ら。宇。治。拾。遺。九。ふ。兵。あ。り。法。師。が。佛  
然。ふ。と。あ。ら。ば。後。あ。の。ら。宇。治。拾。遺。九。ふ。兵。あ。り。法。師。が。佛  
供。養。比。條。了。目。残。怒。う。して。人。の。妻。を。は。ぐ。者。あ。り。や。う。く。や  
云。て。太。刀。残。怒。ま。て。云。く。と。有。る。や。う。く。必。也。や。あ。を。後。よ。詛  
れ。る。聲。あ。り。其。を。古。よ。や。と。云。ひ。し。詞。字。神。樂。歌。也。宇。也  
宇。と。有。れ。ど。れ。也。拾。遺。の。印。本。や。う。く。此。下。を。う。く。と。有。る  
を。衍。あり。其。は。を。う。く。と。泣。色。ふ。い。ふ。詞。あ  
り。後。拾。遺。集。比。詐。諧。歌。入。道。攝。政。の。れ。く。あ。多。は。次。う。ふ  
通。ひ。侍。り。な。依。頃。帳。の。柱。了。小。弓。比。矢。を。む。ま。ひ。付。あ。り。な。依  
を。外。ふ。て。取。よ。れ。と。せ。て。侍。り。な。れ。バ。遣。は。と。て。詠。免。る。大。納  
言。道。綱。母。思。ひ。出。る。事。も。何。死。じ。や。見。え。お。ま。と。や。と。云。ふ。こ

我驚オドロクうれぬコト。此コトをカ此コト驚オドロクのし呼ヨメはる聲コト也ヤ。矢ヤ字コト云ヒひ  
 掛カとるコトれり。然カれトも桑家漢語抄コト。箭ヤ伊也イ射遣イ之略ヤ。と有ヒ依  
 然カ言コトふとヒ也コト。和名抄コト。箭ヤ釋名コト云ヒ。笑コト和名夜コトとあり。谷川  
 云ヒ。然カも然カる言コトふてコト。往コト年コト江戸の三十三間堂コトと云ヒ。名コトと  
 通コトし矢コトと云ヒ。を人の射コトする見コトし事コトあり。か此コト矢コト叫コトし於コト  
 射コトするコト。其コト矢コト半コト射コトする勢コトひ掃コトも鏃コトか合コトせて見コトゆる時コト  
 も其コト射コト入コトる更コトおゆ。助コトを去コトる人コト等コトも色コト合コトせて大コト音コトおや  
 往コトと叫コトぶ。其コトあゆ。矢コトまコトと鏃コトを上げて。的コトお及コトぶこと  
 往コトあり。死コト近コトま火コト災コト。火コト粉コトを追コトふとて。諸コト人コト色コトを揚コトげて  
 往コトあり。死コト近コトま火コト災コト。火コト粉コトを追コトふとて。諸コト人コト色コトを揚コトげて  
 避コトるれコトども。最コト奇コトし死コト事コトあり。か。散コトけて軍コト此コト時コト。敵コト身コト方コト  
 加コトとみふ射コト出コトる箭コトを更コトれ也コト。鳥獸コトあど戎射コト取コトむを欲コトるふ。  
 射外コトさじ也コト。彌コトグ上コトふ疾コトく重コト補射コトるを。矢コト續コト早コトとて譽コト依コトお  
 れを是コトとゆ轉コトめて。凡コトて事物コトの數コト重コトれるを。八コト某コトと云ヒふ言コト

起コトめむ。八コト度コト拜コトみ八十コト嶋コトあど此コト八コト是コト也コト。乃コト彌コト字コトおれお  
 當コト依コト。八コト字コトを訓コトむも。此コト義コトれるコト。其コト根コト元コト也コト。由コト良コト比コト夜コトと約コトゆ。  
 遣コトの活コト機コト字コト爲コトせるふ起コトまゆ。八十コト嶋コト八コト度コト拜コトみあぞの八コト也コト。  
 此コト義コト小コト見コトるコト。由コト也コト。既コトも大人コト等コトの教コト示コト置コトれし事コトあり。然コト  
 中コトも正コトし死コト數コトを云ヒ。事コトもあまコトと有コトゆ。其コトを古コト史コト傳コトふ。然コト  
 云ヒ。依コトおて知コトゆ。本コト篇コト比コト夜コト良コトとゆ。夜コト和コトふ至コト依コト九コト段コトの夜コト。  
 之コト乃コト是コト義コトも漏コトる。事コトれし。其コトを此コト夜コト聲コト了コト。上コト件コト比コト譜コト比コト如コトく。  
 良コト行コトの五コト聲コト相コト副コト牙コトバ。夜コト良コト。夜コト理コト。夜コト流コト。夜コト禮コト。夜コト呂コトと活コトまて。逐コト。  
 鐘コト遣コト同行コト相コト從コトふ。夜コト々コト。夜コト以コト。夜コト由コト。夜コト曳コト。夜コト余コト也コト。稍コト咄コト動コト。惟コト乃コトと  
 比コト祖コト言コトれるコト。更コトあゆ。遣コトを夜コト良コトと起コトめて。遣コトゆ。遣コトる。遣コトま  
 遣コトるコト。ゆ。此コト名コトとれ也コト。逐コトを夜コト良コト比コトと訓コトむも。夜コト理コトを延コトぶる  
 言コトお也コト。稍コト漸コト較コト旋コト差コト微コト良コト徐コトあど戎コト。夜コト々コトを訓コトむを皆コト同コトじ事コト

ふて由レ良ク此約ニ殊ニ著シ其レ古事記石屋戸段ノ逾ル思フ奇ト而シテ稍シ自レ戸出テ而シテ有ル也ト動ク出テ御セる趣ヲ思フふレ然レ貴人ノ座所ヲ移シ給フを動ク座ト云フも能クくレ然レ是レ動ク字ヲ夜ニ毛須ノ禮婆ト訓ム夜ニも同ク言フ微シ然レ動クと寛ク元ヨリ同ク言フの義ヲ故ニ其レ寛クれルも徐ク形ヲ吐キ惟ニの事ヲ加行ニ從フ也ト燒クの活キ佐行ノ從フは優ニ養ニ泰瘦ニ多行ニ從フ也ト奴谷ノ竇備ノ那行ニ從フ也ト梁脂ノ屋波行ニ從フ也ト和藪ノ麻行ノ從フ也ト山止ノ病寡ノ和行ニ從フ也ト徐クあり。是等ニ此夜ニみテ遣テ此義ヲれル哉ヲ以テ知ル也ト。あハ是レ等ノ言トありシ末トとシめテ別ニ義ノ如ク聞ル也トも有ル也ト其原ノ子ノ流ル也トは本ノ篇ニ因テ此ノ釈ニ見テ知ル也ト。○レはテ以テ也ト由テ理ノ約ヲあレど。如此ニ調ヒ竟シとシ上トとシめテ云フバ。伊ハ伊ハ冠レ

る聲ヲれル故ニ。阿行ノ伊ハ比シぬキ也ト。氣進ニ苛クありシろ壯クあリして。彼伊ハ代リて。下ニ活機ヲ爲ス也ト。喉音ニ三行ノ論ニも云フ。活キ如シ。下ニ活キとシハ上ニ論ヲするレ也トいフ也トいフ也ト。次ニ謂フ也ト見ル。然レ活キは是レ以テやグて。弓ヲ射ル也ト以テ上ニ件ニ此譜ノ如ク。良行ニ五聲ノ相副ヲ也ト。以テ良ニ以テ流ニ以テ禮ニ以テ呂ニ也ト。機ヲぞテ苛ク射テ憫ヲ拵ル也トの祖言ヲれル也ト更ニれル也ト。阿行ノ伊ハ從フ也ト。是レ故ニ苛ク起レ也ト。入テ活機ヲ出テ也ト對シて。内ニ入ル也ト。色モ同ク言フ也ト。彼ノ牙ヲ放チ遣ル也ト。射ル也ト。耳ノ聞ク也ト。此ノ同ク言フ也ト。加行ニ從フ也ト。嚴怒ノ佐行ノ從フは。勇ニ頻ニ磯ニ多行ニ也ト。己ノ知ル也ト。味ヲ加行ニ從フ也ト。嚴怒ノ佐行ノ從フは。勇ニ頻ニ磯ニ多行ニ也ト。

此從ふて痛出乞最那行の從ふて稻往犬波行此從ふて飲  
言麻行此從ふは忌夢同行相從ふは彌愈和行の從ぬは言  
れし此等此以みお氣晉む意象あるを以て知るしおは是  
寺の言  
とり轉用假借し出ある諸言を更あり他言亦下ふ奉  
る諸言此類ひ切りて以色と為れるははと自然不以色の  
義を生せり其在本篇よ○はて由て由流の義本質ふて其  
次く釋く哉見て知るし○はて由て由流の義本質ふて其  
言此始免て出ある也神代紀一云尔伊弉諾尊乃向大樹放  
屍此即化成巨川とあゆ本注了放屍此云愈磨理と有る愈  
乃是ふて磨理を放ふ當ゆ屍字由せ云は温泉此由ふ同也  
と湯てふ言ふて放出給ひし時を湯あゆし故ふ湯と云ゆ  
あれど實は水よて水此初め也即皇祖二柱神の御屍ふぞ

有々依其は是とゆ前了伊弉冉尊此御尿ふ水神の生坐る  
残思合せて知るしおは是事小就ては殊小微妙ある故と  
し有れど其を此ふ盈しがあし古史傳  
を見てはて湯を由せいふ言義を湯水ばの也寛く志とる  
物の有こそ無く動寛元とゆ同言あれむ此二義を兼ぬゆ  
扱はと水ふまれ湯子沸せゆふはま浴もし灌苑もあて體  
ふまき物ふまき淨むる哉由麻波流を云ひ是とゆして齋  
庭齋郡あど云ふ由てふ言起まり此字はと同行相通はし  
て以せも云ぬ忌はと齋字以美と訓る是なり和訓葉よ齋  
を也と訓む  
をいむの及しゆあり湯をむむは齋の義清潔の意ありを  
云るは本末違ふ已委くは本編夜行此第四章ふ云哉見る  
ははて此由美以美元とゆ同語ふて疑れく由麻理此約あ



ゆ。然れむ弓哉由美と云も。同語れること著し。其を書紀よ。  
由麻理てふ古語ふ。放屁と書れと依能叶いて。放尿放屁れ  
ど用ふ。赤縣此熟語なるが。射る哉放せも云て。同義の語ふ  
流哉古ま祝詞よ。射放物止弓矢と有依詞哉も。按ひ合せて  
曉る法し。はと盤書れどふ。放屁をを轉。矢氣と云ひ。水写  
常あれど。然る假借も。其音の元とゆ。同義ある由の。かく按  
ひ續くれば。弓はと齋を。單よ由を云。本語ふて。麻理てふ  
詞の副しとゆ。由美といふ體語と成りまど。其を却めて末  
ふて。其本を由流の約也。動まと寛の義れること疑ふし。其  
を此由よ。上件此譜の如く。良行此五聲相副牙也。由良。由理。

由流。由禮。由呂也活死て。瓊動寬搖れどの祖言れるを更ふ  
也。夜以由よ。良行の從する言を。亦數多ある哉。此ふて其  
活機の大要を。知れむ為り。かく四五言或を一二言を  
出せり。其は別よ。委曲ふ。釈する本篇あり。か於文辭の繁死  
を厭ふは。前後的の諸行。相從ふ言等。哉畧記せゆも。此例  
とゆ。加行此從ふは。床雪行。佐行此從ふは。搖齋動。多行此  
從ふ也。寬燦那行此從ふを言れし。波行此從ふ也。結の活交  
麻行の從ふは。齋弓。同行相從ふは。忌和行の從ふは。故是等  
此由み也。右此義等ふ漏る事れし。用假借し出とる諸言  
は更なり。他言はても。下よ奉依諸言の類ひ。切て由。色と  
為れるも。はと自然。由。色此義を生せり。其を本篇ふ。次々  
て知る。○はて曳也。由禮の約ふて。阿行此延也。伊此冠れ  
る聲ある故也。阿行此延也。老成を依ふ比ふま。得此義こ

せふ劇志と壯おして。彼延よ代て。下は活機を爲さむ。喉  
 音三行論ふも云。依が如し。下は活くとハ。上は論ずる。さえ  
 此寺の外をれ多あり。本おえはかえれどのえを云あり。  
 篇よ次く謂ふを見て知る。然依む。上の夜以由の矢射弓  
 ぬると。阿行の延れ得あると。依て按ふ。此行は曳を善  
 の義ふて。擇れ曳やぐて是あり。其は古事記神世初免ふ。  
 伊邪那岐。伊邪那美二柱神。のあみふ。天之御柱を往廻り會  
 へして。阿那邇夜志。愛衰登賣衰。阿那邇夜志。愛衰登古衰。と  
 詔ひ相せる御詞の愛む。師説ふ。書紀一書ふ。可愛と書て。此  
 一云。哀と見え。正書ふを。可美はと一書ふ。善せあり。是等此  
 字ふて。其意顯あり。神武天皇段の大御歌ふ。延衰斯麻加牟

とあ依延も可愛少女と云こと。取て。書紀の可愛は字の意  
 愛ハ。只假字おて意。まと雄略天皇段の大御歌ふ。吉野を延  
 斯怒と詠せ給ひ。天智天皇紀は童謠ふ。多拖尼之曳雞武と  
 あ依。曳は即余あり。同時の歌。御吉野。はと住吉日吉は類  
 を美曳之。弩と何るおて知るを。  
 古牙余伎字延と云。依こと多し。今も然も云。れ。少有。お  
 余伎を延と云。る。さ。然れむ善は。曳と云。ふ。本語。ふ。余  
 万葉。れ。む。多。あり。め。然れむ善は。曳と云。ふ。本語。ふ。余  
 せ。云。は。却。て。後。ぬ。る。戎。擇。は。心。善。と。好。ま。る。物。を。擇。み。取  
 る。義。ふ。て。上。件。は。譜。の。曳。良。曳。理。曳。流。曳。禮。曳。呂。魯。乃。其。活。機  
 不。依。ぐ。阿行の延。小。良。行。は。從。ふ。た。得。の。活。機。お。て。我。お。得。持  
 行。は。曳。小。良。行。は。從。ふ。た。擇。は。活。用。お。る。の。故。了。俗。言。小。余。理  
 取。る。と。も。云。ふ。佗。小。有。る。物。を。善。と。擇。み。取。る。義。お。め。其。上

延引く愛登賣衰登古衰の愛ま延衰斯麻加年此  
物を得物と謂ふも字此如く思はむ事も無れと善物は  
と擇物の意深うるべし其仇小まれ鳥小はま獸小ま  
彼を取らむと擇み射る意有まむあり得せ擇かく微ある  
差別ある故了早く假字混らして古事記多延を  
用ひ書紀多く曳を用ひて中希小偶中武美曳之加行  
弩の如く叶する言も有れど其み希小偶中武美曳之加行  
以下。和行小至依八行此從ふ言多く傳はら支枝胞夷鰕鯨  
あぞ我。此行の假字れらむ歟。と思ふ耳あり。其深き故を  
凡て第四段此色を迫れる色小て言少き中も阿行の延  
其祖色あま其行小著はま如くむげ小言也。阿行の延  
の曳其子代ゆて下よ活用くを思ふ其用を悉。○はて  
く此曳此司る所あらむと惟ふまで此事小去そ。○はて  
余。由呂此約也其本質小て乃阿行の於小伊の冠ひて成  
れる聲れるぐ。は於日此没りて。聞とれる残余と云は寄て

ふ言あり。其在神世の歌。青山小日ケ隠らバ。然ば玉此夜  
を出れむ。と詠免る詞此如く。日往れば夜の來り。夜往けバ  
日此來也て隔をあし。晝を起居て事我爲去我。夜を寄居て  
息へむれ也。故古をも今も。貴人あど此寢給ふを。御余流を  
いひ。起ま給ふ字。御比流とを云牙ゆ。其は中務内侍日記  
は祓らまげ。同じ日記小御ひるをゆ。前小と参りあまバ云  
云。増鏡小けふ此日ケ御覧せでたをるあれむれど多と見え  
著聞集五小月我も御覧せでたをるあれむれど多と見え  
さゆ。今を御ひるを。おひあり。おひれ。たひあま。おひれ。ら  
むと活うし。御を。寄とを。元より同言ある。故あ也。扱は  
と。世代あど我余を云ふも。夜と同語小て寄あ也。其。万葉  
二卷小。天地之依相之極所知行神之命等云く。六卷小。天地

乃依會限萬世丹榮將往迹云々詠る如く。天と地を寄相  
ふ極み。人ほと物の寄て在るが故ふ謂ふ言れ也。谷川翁云  
訓むを寄の義あり。老萊子。人生於天地之間。寄也。と云。代  
運葉をむむも同じ。万葉集。寿をも訓。夜は世の移り易  
る如く。同語ある。佐と依とも云。ハ。体用此詞あり。日易  
依とも轉びる。如し。おとる。御夜。たひれる。御昼  
形。依。仍。あど。残。訓。む。は。世。を。射。用。の。詞。あり。但し。世。代。此。字  
を。し。せ。云。牙。る。も。然。る。言。あ。ま。と。未。委。う。ら。更。但し。世。代。此。字  
義。をも。別。ち。て。云。牙。才。世。残。余。せ。云。才。歳。字。余。と。訓。む。よ。同。じ  
と。暑。往。ら。ば。寒。死。と。り。寒。往。け。バ。暑。來。り。お。か。く。年。重。れ。る。残。云  
ひ。代。字。余。と。云。ふ。才。甲。退。ら。ば。乙。代。り。丙。退。け。む。丁。代。る。如。き  
を。謂。ふ。此。を。共。了。晝。夜。の。替。依。ふ。相。似。ある。故。了。余。と。云。ふ。然  
依。才。常。夜。常。世。此。文。字。を。替。異。ま。全。同。語。れる。残。も。思。ふ。る。し。

己が常世常夜の説也。記傳取る師説とハ甚く異あり。けて  
其才あし。小益し。唯し。古史第四十三段の傳を見。た。け。て  
竹比兩節の間を。余。と。云。ふ。も。同。語。あり。然。る。残。和。名。抄。小。節。  
竹中隔。而。不。通。者。也。和。名。布。之。兩。節。間。云。答。俗。云。與。故。以。舉。之。  
也。あ。り。兩。節。間。を。與。と。云。ふ。也。俗。ふ。才。非。交。其。才。繼。體。天。皇。紀  
の。歌。了。以。矩。美。娜。開。余。囊。開。と。見。え。組。以。才。發。語。よ。冠。れ。る。あ。り。  
六月十二月。此。晦。日。小。節。折。の。神。事。あり。て。其。御。政。不。出。け。依  
依。荒。世。和。世。此。世。と。云。も。竹。比。答。了。御。世。字。係。と。る。語。れる。残  
也。古今集雜部。木。小。も。あ。ら。更。草。小。も。何。ら。然。竹。比。節。の。間  
よ。わ。ぐ。身。を。成。ぬ。ら。れ。也。師。説。よ。與。才。節。と。節。と。此。間。を。ま  
ども。古。と。り。通。は。し。て。其。を。も。節。を。書。く。は。常。形。也。有。る。が

如し。天と地を依相ひて、寒暑往來し、於て、歳の世を形し、昼は節あるを依りて夜を形し、夜あるを依りて昼を形し、竹て節あるを依りて、答を形し、答あるを依りて、流まれば末とては、如此甚く引放れと依言は如く聞ゆまども都てを寄れ義を出依こそ無し其上件の譜は如く、良行の五聲相副牙ば、余良、余理、余流、余禮、余呂と機まで、寄自夜、糾宜あどの。祖言れるを更れぬ。此を寄り起りて、依り從る據ま寄らむて、敏び甲ひ萬於透け躑く耳あら雲糸を終るも同じ活きふ是より出とゆ委くは本編を見て知る法し。加行の從ふた。善能除横、佐行の從ふた。任好奇、依裝、多行は從ふた。攀、淀、那行は從ふた。米、波行は從ふた。宵、呼、麻行の從ふた。數、讀、娠、同行相從ぬは言あし。和行は從ふも言あし。此等比余みあ寄

此義あるを以て知るし。おは是等の言より轉用假借し出小舉る諸言の類ひ切りて余、色と為れるを、は自然了。下余、色、の義を生せぬ。其を本篇小次く釋く。我見て知るし。○はて此行は音義互に相通ふ事は有るを。彼、二十五言は横五段、豎五行、を整へる上ふて。初行の五言は、共、小、夜、を、あり。第二行の五言は、共、了、以、と、れ、也。第三行は五言は、共、よ、由、と成也。第四行は五言は、共、了、曳、を、也。第五行の五言は、共、小、余、と、成、ま、る、小、因、る、事、れ、ぬ。故是を以て、同行あるがひ、其音を、一、ふ、して、其、義、の、易、依、事、あり、其、を、此、一、色、は、抑、是、行、の、五、み、然、る、を、非、交、以、由、曳、余、も、共、了、れ、お、じ、趣、あり。聲、かく、彼、二十、五、言、は、混、錯、ゆ、て、調、牙、依、が、故、了。今、し、も、一、義、を、執、て、ハ、決、免、難、交、ふ、似、と、れ、ど、其、中、小、就、て、夜、の、主、ある、を。

遣ヤラの義カ小シて。由良夜良カ約ツめ。以イ此主シと依レて。苛イ此義カよテ。由理以理カ此約ツめ。由魯動ユル此義素モ不レて。上下カ此四義カを兼カね。曳ユ此主カあるを擇セの義カ不レて。由禮曳禮カ此約ツめ。余ヨの主カと依レて寄ヨの義カ不レて。由呂余呂カ此約ツめとテ。各カ其カ上カに冠カれる四十五言。各カ其カ下カに從カへる五十言。共カ此義カ不レ事カ不レ事カ。各カ其カ上カに冠カれる四十五言とハ。夜カ以カ由曳余カを頭カに冠カれる言カの各カ四十五言カ。有カるを云カひ各カ其カ下カに從カる五十言とハ。夜カ以カ由曳余カの下カに從カる言カの各カ五十言カ。既カ古言活用カ此條カ夜行カの所カ云カる依カ如カ。故カ是カを以カて遣カ苛動カ擇カ寄カ。此カ行カ此顯カ不レ立カち。由良由理由流由禮由呂。拙カの幽カ殘カ主カ。言カ靈カの幸カを爲カし。うカ其音象カ此はは。不レ夜カ初段カ不レ在カりて。壯カ初カむる音カ殘カれし。以カ魯二段カ不レ

居カて。壯定カむる音カを爲カし。由魯三段カ不レ在カりて。壯カ用カふる音カ殘カれし。曳カ四段カ不レ居カて。壯カ今カ此カ音カ殘カ爲カし。余カ五段カ不レ在カりて。壯カ終カる音カを爲カせり。五カ色カ共カ。動カの義カ持カある。各カ初カ定カ用カ令カ終カ。音カ此カ別カる。ハ。初カ色カ此カ父カ了カ稟カとカ。色カは。推カ定カむる言カ由カ。事カを推カ治カむる言カと云カ。は。いカまカと委カうカらカ。加カく。此カ五聲カ此語カ上カ不レ在カり。語カ下カ不レおカて活機カ此カおカ。其カ連聲カ不レ因カりて。義カの轉カ易カ。はカと或カ上カ省カり下カ省カりて。各カ一聲カの言カを爲カれるも少カうカらカ。其カは此カ所カ不レ盡カし難カれを。是カ聲カとカ此カ出カ流カ諸章カ此カ因カく不レ釋カ辨カ不レ殘カ俟カるし。

和カ于良章カ于理于流カ于禮袁カ于呂  
和良章理于流惠于禮袁于呂

是、行の五聲也。日文傳ふ云、依如く。謂ゆる合喉音ふして。五母韻此頭。各々于聲冠ひて。成まる聲等れる。其音象を惟ふ。和と和良理ととある聲。章ハ韋理くとしとる聲。于を于流理ととある聲。惠と惠禮理ととある聲。袁と袁呂理ととある聲。依聲也。共うかく良行は五聲。其の形象。成助けて。例の合口言形。于流てふ言の。出來しとて。起り初り。依此。古今。和と良と。和と理と。于と呂と。袁と呂と。然と謂ふ類の形容言。此多ある。然と思ひ通して。辨ふる。然と本。此下。于良和良。然と注せる。其本義。然依と。和行篇の初章。れる。二十五言。成。神典。此古傳と。阿聲也。和行の從子。依五言也。徴し。攷りて。是字。知まり。依り。其二十五言。此譜かく。

和良	章良	于良	惠良	袁良	比如し。是。章。第二段。于流の合口言。
和理	章理	于理	惠理	袁理	形。其。中央。小位。して。其。豎。横。は。と。斜。貫。通。を。趣。小。意。を。潜。然。て。此。行。も。三。段。字。流。を。起。り。得。居。べし。抑。是。お。扱。心。得。居。べし。
和流	章流	于流	惠流	袁流	
和禮	章禮	于禮	惠禮	袁禮	
和呂	章呂	于呂	惠呂	袁呂	二十五言。于流を起り。麗の義。ふして。于良。于理。于流。于禮。于呂。と。機。なる。于。良。と。和。と。約。して。初。段。居。り。于。理。と。章。と。約。して。二。段。居。り。于。流。と。于。を。約。して。素。の。は。三。段。居。り。于。禮。と。惠。と。約。して。四。段。居。り。于。呂。は。袁。と。約。して。五。段。居。り。是。を。以。て。此。行。五。聲。の。初。義。ハ。共。小。麗。字。の。義。也。但。し。其。段。位。也。五。







せる隨オホ其様字大御言オホミコト詔ミコトノミコトひ形カタはし給タマフ牙キバ依ヨぐ此コノ行ユク五聲ゴシヤウ  
純モト元基トキと爲ナれること疑ウタガハシ形カタし其ソノを諦シラシメしく然シカ語コトり傳ツタへし事コト  
因ユ穉シれど云イハ語コトを當タ昔コト去リ有ルなる趣オモを正ただ目メ見ミ行ユクせし神カミ  
ひ合アせていいで其ソノ元基トキの然シカ依ヨ所以ソノを阿ア聲コトと和ワ行ユクは從ツへる  
五言ゴゴンふ因ユてぞ所シ知チ然シる其ソノ阿ア行ユク篇ヘン第九章クウの初ハジメ段ダン形カタ依ヨ阿ア  
和ワ阿ア章シヤウ阿ア于コ阿ア惠ヱ阿ア袁ヱンは五言ゴゴン是シあり阿アを皆ミ例レイは指サシ聲コトふて  
彼カの義ギれり哉カ上ウヘ件ケンの二十五言ニジュゴゴンと相カ照サし攷カふる矣ナリ初ハジメ言ゴンの  
阿ア和ワを沫アふて青アヲを同ドウ義ギは言ゴンふれど此コノは天地アメノチ已マ了ラ于コ良ラ  
良ラと開ヒけし哉カ阿ア于コ良ラと指サシ詔ミコトノミコトせるが乃ナリ其ソノ言ゴンと爲ナり良ラは開ヒ  
音ネふ因ユて阿ア和ワを約ヤクす右ミダリ譜フの初ハジメ段ダンあり和ワ良ラ和ワ理リ和ワ流リウ和ワ

禮レイ和ワ呂ロは活ハタ機キ字ジ形カタし阿ア于コ良ラを乃ナリ彼カ麗レイの義ギ形カタるが開ヒ音ネ  
を一字イツ訓スり綜ソウて泡ウの義ギを成ナせり此コノ言ゴン古コくを決ケて泡ウ  
正ただ泡ウる泡ウまれど活ハる言ゴンありむ哉カ其ソノ言ゴン後ノチ傳ツタはらば  
但タし俗ソク言ゴンふ吟イン哀アイを阿ア和ワと云イハはて阿ア和ワ良ラを阿ア和ワを約ヤクす  
は波ハと和ワと素ソとゆ通ツ牙キバ形カタなり  
阿ア和ワ理リを阿ア章シヤウと於オまゆ阿ア和ワ流リウは阿ア于コを於オまゆ阿ア和ワ禮レイを  
阿ア惠ヱと約ヤクす阿ア和ワ呂ロを阿ア袁ヱンと約ヤクす泡ウは活ハタ機キ形カタるが其ソノは  
言ゴンふ就ツキて去リ我ガ泡ウ字ジを用ヨウぬれ實マコトふを青アヲの義ギりて古コ語ゴふ大オホ  
空ソラの壁ツツ立タち状サマ字ジ青アヲ雲クモは降オリ居キ向ムカ伏フス去リ極キマみと云イハひ大地オホツチは廣ヒロ  
ら死シ状サマを青アヲ海ウミ原ハラ潮シホ之ノ八ヤ百ハク重ヘと云イハ依ヨ如ニ青色アヲやがて天地アメツチ  
の初ハジメとゆ其ソノ麗レイ稚シ氣キの薰カホ滿ミツとる泡ウれをバれ也ナリ青アヲを説セ文ブン  
也ナリ木キ生ス火ヒ从ス生ス丹ニ段ダン注ツふ考カウ工コウ記キ曰イハ東トウ方ホウ謂イハ之ノ青アヲ丹ニ赤セキ石シヤク也ナリ南  
方ナン之ノ色シキ也ナリ韵イン會エふ凡ソト遠エン視シ之ノ明メイ莫ム若ニ丹ニ青アヲ黑クワク則スレバ味ミ矣ナリ字ジ彙エふ荀

子青出干藍而青于藍音精青堅剛茂盛之貌と見え泡を  
同書す水上浮漚也とも沫字涎沫とも水沫也も浮沫とも  
見えとゆ泡青此字義を斯の如くれまど我古言此阿和  
阿衰を麗稚な義ふて藍草を阿章と云ふも是より出たる  
ガ青侍青女房がと云哉始久青某せいぬ言の多うるをみ  
れ稚な義より轉り出たる言等なり本篇を見て知るべし  
然るに阿聲了和行此從牙る五言を彼譜の初行形る和良  
章良于良惠良袁良の活用をハ其元一ふして彼麗を指と  
依言此活機ありしが阿和阿章形どの五言を其副ある良  
聲の忖れる言和良章良等此二十五言は其冠と依阿聲の  
省かり齊へ依言等了て共ふ右ふ論ふ大御言あてし當初  
此神語れること疑れし然依を阿色は凡て指とる事物の  
阿和を彼麗と指とる物よと彼破と指とる所ある言れり  
を以てかくハ謂ふあり其を阿和此一言を姑く良行の五

色をそそ彼和理和流れどの五言各々指色  
の阿を冠らし活加し呼試みても知るべし  
此說等ハ此行五聲れ起原はと各音ふ一義を持とる較畧  
の說れるが然しも調ひ竟ある事也喉音二行論ふ云子依  
如おて其實を阿行此五聲よ合音の祖れる于此冠れる故  
字以て其音みお自然了麗稚く聞ゆる中おも于良此和と  
變るふ良聲れ韵れる阿此圓滿れるが残りて其根韵を成  
り其初聲于あるが故了其音はと圓回れ玄意象ありて遂  
お其形せ依物了云言と爲して彼泡の和を更れり古事記  
子丸邇坂丸邇臣れど有依丸此訓みは但し此丸を師を訓お  
死はと天武天皇紀お河曲と書き万葉一卷お島回二卷了

浦回れども多く見え。和名抄車具ふ。輪車脚所以轉進也。和名  
和と有るおど是あり。谷川氏云轉字ワと訓むも同じ。勾を  
酒勾の類ひはぐりせ訓むおどと云  
ゆ。故是を以て此聲言は上ふ在て。全く稚の義と聞ゆる言  
ふ。回の義を含み。當ふ回は義と聞ゆる言ふ。稚は義を兼ぬ  
る。何に。其上件は譜の如く。良行は五聲相副。牙。和。良。和  
理。和。流。和。禮。和。呂。を。活。ま。て。破。割。惡。我。童。れ。ど。の。祖。言。取。る。を  
更。あり。此破ふ起めて破る破る破らむと活用と成  
本よてかく種いふ轉用し。藁はと笑ふも是とり出  
とに委くを本編。加。行。の。從。ふ。を。稚。協。漏。別。佐。行。の。從。ふ。は。態。  
驚。忘。走。多。行。は。從。ふ。を。渡。那。行。の。從。ふ。は。蹄。鱈。波。行。は。從。ふ。を。  
侘。麻。行。の。從。ふ。と。夜。行。は。從。ふ。を。お。は。言。れ。し。同。行。相。從。ぬ。は。

破枝是等此和み。右は義ふ漏る。事取し。あふ此等の言  
し出とる諸言を更あり。侘言ふても切りて和色と為れる  
は自然と和色の義を生せり。其在本篇ふ次く釈くを見て  
知る。○はて韋。上。件。は。于。流。の。于。理。と。活。る。は。理。聲。は。副。  
お。ま。む。伊。を。成。べ。成。于。は。仍。留。は。り。て。伊。の。于。の。冠。を。稚。  
聲。を。取。り。彼。伊。を。氣。動。く。意。の。音。取。る。成。此。章。を。其。反。り。て。處。  
定。は。る。義。あり。其。は。處。居。坐。れ。ど。を。訓。む。は。更。あり。井。成。訓。む  
も。態。と。掘。と。る。坎。ふ。は。ま。泉。水。を。溜。る。所。お。ま。れ。水。は。處。聚。ま  
る。所。ある。故。に。章。と。謂。ふ。はと堰を訓むも塞して水を蓄ふ  
る所おれを謂ふあり。谷川氏云堰  
を今俗誤めて也。云牙。を。井。を。は。と。率。將。帥。を。と。成。訓。む  
立。る。を。也。を。と。て。と。云。ふ。類。あり。我。が。許。に。引。居。は。義。と。通。え。蘭。を。訓。む。を。居。席。を。造。る。草。取



我レ不レ得ル形ル此レ一ト言ハ不レ也。彼レ宇ト加レ行ハ從フ不レ浮キ動ス佐ト内外の差別ある事を知レ辨ハ不レ也。加レ行ハ從フ不レ浮キ動ス佐ト行ハ從フ不レ失セ嘘ヲ多ク行ハ從フ不レ打ツ伐ヲ棄テ那レ行ハ從フ不レ言ハれし。波ノ行ハ從フ不レ初ニ上ル麻ノ行ハ從フ不レ海ノ産ニ夜ノ行ハ從フ不レ敬ス同行相從ハ言ハれし。是レ等ノ于カみル稚ク外ニ於テ言ハ等カゆ。然レ本ニ是レ等ノ言ハ等ト轉用せル言ハ等モ多クのゆ。はト佗ノ言ハみテも切リて于テ色ト為レるト自然ニ于テ色ノ義ヲ生セ見テ知ル也。ちテ此ノ行ハ于テ純ニ一ト音ハれル言ハ等ニ十二支ハ卯ト字ヲ訓ム外ニ聞カるト無シ。そレ卯ヲ于テ訓ム也。兔ハ義ハ不レ此ノ行ノ音ハ由ル也。はト万葉集ニ宇佐藝ノ和名抄ニ宇佐伎ト有レと。はト万葉ニ兔原ノ卯名手ノ兔道ノ卯管ハと有レはト于テ許ス也ト呼ビ故ニ。其ノ省語ヲ假字ニ用ヒるレ也。獸名

小省語を用ヒる例ハ鹿ノ加ハ猿ノ佐トばハのゆモ呼ビ牙ハ是レあり。はト十二支ノ子ヲをネと訓ム也。鼠ノをネと云ハは根ニ因リて始メて聞カえル物ハ不レ根ノ住ル義ハ然ル也。万葉字ヲ省スてネとノみユるト也。ちテ例ハ然ル也。十四支ハ東歌ノ乎ハ佐藝ト見エ新撰字鏡ニもハ乎ハ佐藝トあり。是レ本語ニ于テ佐藝ヲ却シて同行ニふシて。其ノ音ハ轉スるレ也。然ル也。此ノ物ハも。大國主ノ神ハ奉ル也。物ノ御尾前ありし故ニ。此ノ名字ハ負ヒて依テ于テ佐藝トも云ハるレ也。卯ヲをウ也訓ム也。此ノ行ノ于テ形ル也。炳ハ馬ノ也。谷川氏云兔ハ吐シ而レ生ス也。てハ各々と云ハるト云ハれド然ル也。非ズ是レ物ノ大國主ノ神ハ御尾前と奉ル事ハ古史ノ第八十段ニ見テ知ル也。○ちテ惠ハ上ニ伴ヒて于テ流ル也。于テ禮ハ活ケるト禮ノ聲ノ副ハ也。ばハ開口ニして延ビて成ル也。然ル也。進ミ敢テ宇ハ仍レ留ル也。













るを。少を美る方とゆ出ある。万葉字始め諸書。尾緒絃  
麻苧岑岡丘。戎も訓。依を。大。對。子。て。小。比。義。れ。る。ま。と。准。子  
て。知。る。し。其。尾。ハ。射。の。大。れ。る。小。對。子。て。袁。と。い。ひ。器。よ。於  
苧。を。云。は。細。き。を。云。ひ。岑。岡。丘。を。省。れ。る。言。れ。り。但。し。陽。雄  
小。對。子。て。其。小。れ。る。戎。小。處。と。云。を。省。れ。る。言。れ。り。但。し。陽。雄  
牡。れ。と。戎。袁。と。訓。む。を。其。陰。雌。の。小。を。省。れ。る。言。れ。り。但。し。陽。雄  
云。を。き。が。如。お。れ。と。此。を。男。の。少。を。省。れ。る。言。れ。り。但。し。陽。雄  
る。袁。を。轉。せ。る。訓。を。ま。ば。大。小。の。小。戎。を。稱。め。て。女。男。と。相。對。子  
して。老。少。の。少。を。袁。と。訓。む。意。取。り。思。ひ。錯。ふ。べ。う。ら。は。は。と  
地名。を。初。瀨。を。筑。波。を。比。獻。を。依。保。れ。と。云。る。を。は。小。字。戎  
用。ふ。る。如。く。少。く。美。し。死。由。稱。多。る。詞。ま。と。梅。尾。槇。尾。松。尾。  
高。尾。れ。と。云。依。を。峽。峽。那。と。戎。訓。依。同。く。山。比。尾。お。り。歌  
尔。峯。も。岳。も。詠。る。是。お。り。上。此。を。初。瀨。お。と。云。類。を。葉。よ。  
發。語。の。辞。を。云。る。を。非。れ。り。然。

れど。戰。國。策。に。楚。山。之。尾。常。山。之。尾。れ。ど。有。る。注。し。尾。猶。末。と  
云。牙。り。万。葉。も。不。峯。岑。戎。も。を。め。り。尾。小。根。の。義。あ。れ。ば。み。祇  
と。同。意。お。る。お。や。古。事。記。に。五。十。隱。山。三。尾。之。竹。矣。と。見。え。し  
も。峯。尾。の。義。も。や。神。代。紀。に。丘。陵。を。と。め。る。戎。の。略。お。り。  
や。云。牙。依。を。ち。て。上。り。引。お。る。神。語。に。愛。袁。登。古。袁。愛。袁。登。賣。  
然。る。言。れ。り。然。る。言。れ。り。然。る。言。れ。り。然。る。言。れ。り。然。る。言。れ。り。  
袁。れ。末。の。袁。を。記。傳。お。余。を。云。よ。通。ひ。て。袁。登。古。余。袁。登。賣。余  
と。云。む。が。如。し。此。例。古。多。し。其。八。重。垣。袁。れ。ど。の。袁。も。其。八。重  
垣。袁。作。る。と。上。牙。廻。る。袁。お。ハ。非。交。八。重。垣。余。此。意。お。り。と。有  
依。が。如。し。此。外。お。袁。を。ふ。一。言。に。種。々の。用。格。ま。と。て。お。を。は  
さ。り。お。不。後。人。の。そ。を。學。び。て。論。は。と。葉。も。右。の。神。語。を。舉  
ひ。増。さ。る。書。等。も。あ。ら。有。と。ぞ。は。と。葉。も。右。の。神。語。を。舉  
て。神。代。紀。に。お。可。愛。少。男。歟。可。愛。少。女。歟。と。何。也。歟。を。袁。と。訓。  
也。云。依。も。然。る。言。お。て。其。正。書。の。文。お。を。馬。を。袁。を。訓。と。り。

實<sup>デ</sup>ルも彼末<sup>レ</sup>れる衰<sup>ラ</sup>亡<sup>レ</sup>歟<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>れどの意<sup>ル</sup>なる詞<sup>ナ</sup>也<sup>ニ</sup>古事記万葉集取どてふをば此をよ矣を書きとめおと字音ふて非<sup>ズ</sup>乎哉而者此類よて<sup>レ</sup>戎の詞<sup>ヲ</sup>當て訓<sup>ト</sup>するれゆ乎せ同く用<sup>ル</sup>よる例<sup>ニ</sup>墨子<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>在<sup>ル</sup>矣來<sup>ル</sup>晏子<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>矣の類<sup>ナ</sup>り万葉集<sup>ニ</sup>馬<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>訓<sup>ス</sup>たり古今集<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>引<sup>ク</sup>る留<sup>ル</sup>也此<sup>ノ</sup>戎<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>し字書<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>馬<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>訓<sup>ス</sup>と注<sup>ス</sup>ちて上<sup>ニ</sup>阿行<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>引<sup>ク</sup>る淺深<sup>ノ</sup>秘抄<sup>ノ</sup>亦<sup>ニ</sup>稱<sup>ス</sup>せりやも云<sup>フ</sup>り唯<sup>ハ</sup>時<sup>キ</sup>塞<sup>キ</sup>口<sup>ヲ</sup>警<sup>ル</sup>蹕<sup>ル</sup>時<sup>ハ</sup>開<sup>ク</sup>口<sup>ヲ</sup>也<sup>ニ</sup>せ<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>る警<sup>ル</sup>蹕<sup>ル</sup>の聲<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>引<sup>ク</sup>る也<sup>ニ</sup>既<sup>ル</sup>云<sup>フ</sup>依<sup>テ</sup>如<sup>ク</sup>ある<sup>ル</sup>稱<sup>ス</sup>唯<sup>ハ</sup>時<sup>キ</sup>塞<sup>キ</sup>口<sup>ヲ</sup>也<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>是<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>於<sup>テ</sup>衰<sup>ラ</sup>の開<sup>キ</sup>合<sup>ス</sup>大小<sup>ノ</sup>反對<sup>ス</sup>れる<sup>ル</sup>諦<sup>シ</sup>し<sup>レ</sup>死<sup>シ</sup>證<sup>ス</sup>れる<sup>ル</sup>稱<sup>ス</sup>唯<sup>ハ</sup>字<sup>ヲ</sup>名<sup>ヲ</sup>目<sup>ヲ</sup>爾<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>イ<sup>ハ</sup>シヤ<sup>ハ</sup>ウ<sup>セ</sup>唱<sup>ス</sup>牙<sup>ヲ</sup>あ<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>禁<sup>中</sup>各<sup>ノ</sup>目<sup>ヲ</sup>抄<sup>ル</sup>れど諸書<sup>ニ</sup>見<sup>エ</sup>とめ<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>讀<sup>ム</sup>を衰<sup>ラ</sup>登<sup>ル</sup>申<sup>ル</sup>須<sup>ル</sup>と有<sup>ル</sup>れど其<sup>ノ</sup>正<sup>シ</sup>し<sup>レ</sup>死<sup>シ</sup>應<sup>ス</sup>聲<sup>ノ</sup>の時<sup>ニ</sup>も衰<sup>ラ</sup>せ<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>唱<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>也<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>神<sup>武</sup>天<sup>皇</sup>紀<sup>ニ</sup>も天<sup>上</sup>に坐<sup>ス</sup>武<sup>甕</sup>雷<sup>神</sup>の熊<sup>野</sup>高<sup>倉</sup>下<sup>ニ</sup>て天

皇<sup>ノ</sup>部<sup>ノ</sup>靈<sup>ノ</sup>劍<sup>ヲ</sup>進<sup>シ</sup>給<sup>ヒ</sup>ひ<sup>し</sup>所<sup>ニ</sup>高<sup>倉</sup>下<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>唯<sup>ク</sup>而<sup>レ</sup>寤<sup>シ</sup>之<sup>ト</sup>有<sup>ル</sup>れ<sup>ル</sup>也<sup>ニ</sup>本紀<sup>ノ</sup>旁訓<sup>ヲ</sup>越<sup>ク</sup>と有<sup>ル</sup>ちて源氏<sup>ノ</sup>夢<sup>ニ</sup>浮橋<sup>ノ</sup>涙<sup>ヲ</sup>の落<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>戎<sup>ノ</sup>見<sup>セ</sup>せ<sup>レ</sup>と<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>死<sup>シ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>荒<sup>ラ</sup>ら<sup>カ</sup>し<sup>テ</sup>聞<sup>ク</sup>え<sup>ル</sup>居<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>め<sup>ル</sup>云<sup>フ</sup>宿<sup>木</sup>御<sup>盃</sup>は<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>戎<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>宣<sup>ス</sup>へ<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>聲<sup>ヲ</sup>ひ<sup>き</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>也<sup>ニ</sup>當<sup>テ</sup>詞<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>然<sup>レ</sup>れ<sup>ド</sup>此<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>戎<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>稱<sup>ス</sup>唯<sup>ハ</sup>の衰<sup>ラ</sup>せ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>別<sup>ナ</sup>也<sup>ニ</sup>葉<sup>ノ</sup>め<sup>ル</sup>枕<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>目<sup>ヲ</sup>う<sup>ち</sup>あ<sup>ふ</sup>さ<sup>ま</sup>と<sup>ハ</sup>見<sup>エ</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>今<sup>も</sup>人<sup>ノ</sup>ふ<sup>レ</sup>答<sup>フ</sup>て<sup>レ</sup>戎<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>ひ<sup>い</sup>や<sup>戎</sup>いと<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>是<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>祝<sup>詞</sup>れ<sup>ど</sup>あ<sup>リ</sup>稱<sup>ス</sup>唯<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ある<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>口<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>閉<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>口<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>漸<sup>ク</sup>く<sup>シ</sup>開<sup>キ</sup>て<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>文<sup>ヲ</sup>選<sup>ビ</sup>注<sup>ス</sup>唯<sup>ハ</sup>謙<sup>ニ</sup>應<sup>ス</sup>也<sup>ト</sup>見<sup>エ</sup>と<sup>ハ</sup>め<sup>ル</sup>は<sup>レ</sup>と<sup>ハ</sup>單<sup>ニ</sup>戎<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>依<sup>テ</sup>答<sup>フ</sup>も<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>落<sup>窪</sup>物<sup>語</sup>と<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>也<sup>ニ</sup>四<sup>ノ</sup>御<sup>心</sup>して<sup>レ</sup>た<sup>ハ</sup>布<sup>ヲ</sup>さ<sup>む</sup>方<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>給<sup>ヒ</sup>へ<sup>レ</sup>宣<sup>ス</sup>へ<sup>レ</sup>戎<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>立<sup>タ</sup>勞<sup>御</sup>幸<sup>卷</sup>ふ<sup>近</sup>江<sup>此</sup>君<sup>去</sup>れ<sup>と</sup>も<sup>ハ</sup>召<sup>メ</sup>せ<sup>レ</sup>戎<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>最<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>や

うふ聞えて出来ぬ。れど有るを。常の應聲あり。古今著聞集  
八。好色此條  
 了。大二條殿。小式部。内侍。ぐもと。了。月といふ。文字をかまて。  
 使はし。とり。り。ま。む。然。る。ま。む。此。和。泉。式。部。が。女。あ。れ。む。易  
 く。心。得。て。月。の。下。ふ。を。と。い。ふ。文。字。を。り。て。書。き。て。参。ら。せ。け  
 る。月。と。い。ふ。文。字。を。け。り。待。を。し。出。と。心。得。り。ゆ。は。と。人  
 の。め。の。御。答。ふ。は。男。は。を。申。し。女。を。我。を。申。し。あり。と。あり。  
 然。れ。と。丹。生。忠。見。集。よ。三。月。櫻。木。の。本。ふ。て。か。は。弓。い。る。心。よ  
 も。い。ゆ。日。は。弓。を。み。や。ま。あ。る。花。は。何。と。り。は。我。を。ぞ。答。ふ。る  
 と。有。れ。む。を。と。い。ふ。答。を。女。が。加。花。ら。ぬ。如。く。も。聞。え。と。り。此  
 は。あ。ち。致。け。て。此。袁。よ。良。行。は。相。副。子。は。袁。良。袁。理。袁。流。袁。禮。  
 袁。呂。は。居。折。已。緒。れ。ど。の。祖。言。ぬ。る。を。更。あり。加。行。は。從。ふ。を。  
 岳。招。癡。佐。行。の。從。ふ。を。治。教。食。噓。多。行。の。從。ふ。を。歸。遠。劣。那。行  
 は。從。ふ。を。斧。波。行。は。從。ふ。を。竟。甥。終。小。麻。行。は。從。ふ。は。女。夜。行  
 の。從。ふ。は。瘁。和。行。の。從。ふ。は。唯。去。れ。等。は。袁。み。ふ。右。の。義。尔。差

小事あり。あち。是。等。の。言。々。り。轉。用。假。借。し。出。ある。言。等。も。數  
 多。あり。は。と。他。言。ふ。て。も。切。り。て。袁。色。と。成。れ。る。を。  
 は。と。自。然。に。袁。色。の。義。を。生。せ。○け。て。此。行。の。音。義。互。り。相。通  
 り。其。を。本。篇。を。見。て。知。る。を。し。○け。て。此。行。の。音。義。互。り。相。通  
 事。は。有。る。を。彼。二。十。五。言。は。横。五。段。豎。五。行。を。整。へ。る。上。ふ  
 て。初。行。の。五。言。は。共。り。和。と。成。り。第。二。行。の。五。言。は。共。る。章。を  
 ぬ。り。第。三。行。は。五。言。を。共。り。于。て。成。り。第。四。行。は。五。言。は。共。り  
 惠。と。成。り。第。五。行。の。五。言。を。共。り。袁。を。成。れ。る。ふ。因。る。事。あり。  
 故。是。を。以。て。同。行。あり。ひ。其。音。の。相。通。ふ。耳。あ。ら。ぬ。和。と。呼  
 ぶ。色。を。一。つ。ふ。して。其。義。の。易。る。事。あり。其。を。此。一。色。の。こ。然。る  
 も。共。り。同。じ。趣。あり。抑。是。行。は。五。聲。か。く。彼。二。十。五。言。は。混。錯  
 り。て。調。へ。る。が。故。り。今。し。も。一。義。を。執。て。ハ。決。免。難。ぶ。る。似。と  
 れ。ど。其。中。ふ。就。て。和。は。主。ある。を。破。の。義。ふ。て。于。良。和。良。は。約

ゆ。章の主と依て居の義了て。于理章理の約也。于麗の義  
素なて。上下此四義字り。依て主と依て。彫れ義ふて。于禮  
惠禮の約り。袁此主とるは。折の義了て。于呂袁呂の約と志  
て。各く其上り冠まる四十五言。各く其下ふ從へる五十言。  
共ふ是義ふ差ふ事れし。各く其上り冠れる四十五言とて。  
各四十五言。有るを謂ひ。各く其下ふ從ふ五十言とは。  
和章于惠袁の下。從り言の各く五十言。有るは。  
ふ此を既ふ古言活用の條。波行此所ふ云。如し。斯て其  
四十五言と五十言と。此行五色の機。る。祖言れる。猶  
是より轉用假借し。出ると。諸言ハ更あり。依言ふても。切り  
て此行の五色と成ぬるを。は。自然ふ其義字生せり。其を  
本編ふ。次く釈もて。行。故其破居麗彫折也。此行の顯る立ち。  
くを見て知る。冠し。故其破居麗彫折也。此行の顯る立ち。  
于良。于理。于流。于禮。于呂。其の幽字主也。言靈は幸を爲し。

加於其音象のほくふ。和を初段ふ在りて。阿音此雅也音成  
れし。章は二段ふ居て。伊音此雅也音成爲し。于を三段り在  
りて。宇音の重也音を成し。惠を四段ふ居て。延音の雅也音  
を爲し。袁を五段ふ在りて。於音此雅也音を爲せり。五絶共  
也義を持とる。初色の父り稟とる。色。ま。各。初。定。用。令。終。  
ふ。音。の。別。る。は。五。母。韻。受。ある。音。質。取。ること。上。の。行。く  
の。如。し。彼。固。辭。解。み。和。を。始。言。の。重。章。を。定。言。の。重。于。を。動。言。  
此。重。惠。を。欲。言。の。重。袁。は。治。言。此。重。と。云。る。を。あ。い。ふ。阿。行。此  
重。色。と。定。め。と。る。説。あ。れ。む。か。く。て。此。五。聲。此。語。上。り。在。り。語。  
未。其。義。を。盡。さ。る。者。れ。り。か。く。て。此。五。聲。此。語。上。り。在。り。語。  
下。尔。於。て。活。機。支。た。り。其。連。聲。ふ。因。り。て。義。の。轉。り。易。也。は。  
と。或。を。上。省。か。り。下。省。り。て。各。く。一。聲。の。言。と。爲。れ。る。も。鮮。り。  
ら。交。其。は。此。所。不。盡。し。難。々。れ。也。是。聲。ども。此。出。依。諸。章。此。因。

因<sup>レ</sup>尔<sup>ヲ</sup>釋<sup>ス</sup>辨<sup>ス</sup>ふる哉<sup>カ</sup>俟<sup>ツ</sup>ぶし。

良<sup>宇良</sup> 理<sup>宇理</sup> 流<sup>宇流</sup> 禮<sup>宇禮</sup> 呂<sup>宇呂</sup>  
阿<sup>宇阿</sup> 良<sup>宇良</sup> 理<sup>宇理</sup> 伊<sup>宇伊</sup> 流<sup>宇流</sup> 宇<sup>宇宇</sup> 流<sup>宇流</sup> 禮<sup>宇禮</sup> 延<sup>宇延</sup> 禮<sup>宇禮</sup> 呂<sup>宇呂</sup> 於<sup>宇於</sup> 呂<sup>宇呂</sup>

此<sup>レ</sup>行<sup>ノ</sup>の五<sup>ノ</sup>聲<sup>ヲ</sup>を。上<sup>カ</sup>ルも且<sup>ク</sup>云<sup>ハ</sup>依<sup>ル</sup>如<sup>ク</sup>。阿<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>五<sup>ノ</sup>音<sup>ヲ</sup>。舌<sup>ノ</sup>末<sup>ヲ</sup>小<sup>シ</sup>嚴<sup>シ</sup>志<sup>ス</sup>く觸<sup>ル</sup>まで。成<sup>ル</sup>まる聲<sup>ヲ</sup>等<sup>シ</sup>れるが。其<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>象<sup>ヲ</sup>を按<sup>ズ</sup>ふ。良<sup>ヲ</sup>を阿<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup>理<sup>ト</sup>と志<sup>ス</sup>る聲<sup>ヲ</sup>。理<sup>ハ</sup>伊<sup>レ</sup>理<sup>ト</sup>と志<sup>ス</sup>る聲<sup>ヲ</sup>。流<sup>ヲ</sup>を宇<sup>レ</sup>流<sup>理</sup>と志<sup>ス</sup>る聲<sup>ヲ</sup>。禮<sup>ヲ</sup>を延<sup>レ</sup>禮<sup>理</sup>と志<sup>ス</sup>る聲<sup>ヲ</sup>。呂<sup>ヲ</sup>を於<sup>レ</sup>呂<sup>理</sup>と志<sup>ス</sup>る聲<sup>ヲ</sup>。其<sup>ノ</sup>初<sup>ニ</sup>久<sup>ク</sup>加<sup>フ</sup>く阿<sup>レ</sup>行<sup>ノ</sup>の冠<sup>ヲ</sup>ひて。其<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>口<sup>ヲ</sup>言<sup>ハ</sup>れる。宇<sup>レ</sup>流<sup>テ</sup>ふ言<sup>ノ</sup>の出<sup>ル</sup>來<sup>シ</sup>しふ起<sup>メ</sup>て。阿<sup>レ</sup>行<sup>ト</sup>二<sup>行</sup>ふ分<sup>カ</sup>れしる。聲<sup>ヲ</sup>等<sup>シ</sup>ふ亦<sup>モ</sup>有<sup>ル</sup>る。  
本<sup>レ</sup>色<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>ふ。宇<sup>レ</sup>良<sup>ノ</sup>宇<sup>レ</sup>理<sup>ノ</sup>れど記<sup>ス</sup>せるは。其<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>ある言<sup>ハ</sup>。阿<sup>レ</sup>良<sup>ノ</sup>伊<sup>レ</sup>理<sup>ノ</sup>ちど記<sup>ス</sup>せるは。其<sup>ノ</sup>第<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>あり。其<sup>ノ</sup>此<sup>レ</sup>五<sup>ノ</sup>色<sup>ノ</sup>もと形<sup>ノ</sup>容<sup>ノ</sup>の色<sup>ヲ</sup>扱<sup>ル</sup>るが。阿<sup>レ</sup>行<sup>ノ</sup>の冠<sup>ヲ</sup>とる故<sup>ヲ</sup>。始<sup>メ</sup>て音<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>を考<sup>ヘ</sup>ふとれ。下<sup>ニ</sup>論<sup>フ</sup>字<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>るべし。其<sup>ノ</sup>何<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>る。

あれば。既<sup>ニ</sup>ふ阿<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>條<sup>ヲ</sup>ふ出<sup>セ</sup>る。彼<sup>ノ</sup>篇<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>初<sup>ニ</sup>章<sup>ヲ</sup>れる二十五<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>を。神<sup>ノ</sup>典<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>古<sup>ノ</sup>傳<sup>ヲ</sup>。及<sup>ビ</sup>諸<sup>ノ</sup>書<sup>ヲ</sup>れる古<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>。徴<sup>シ</sup>攷<sup>ス</sup>す是<sup>レ</sup>哉<sup>カ</sup>知<sup>ル</sup>ま  
阿<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup> 伊<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup> 宇<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup> 延<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup> 於<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup> ぬ。其<sup>ノ</sup>二<sup>五</sup>言<sup>ヲ</sup>此<sup>レ</sup>譜<sup>ヲ</sup>便  
阿<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup> 伊<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup> 宇<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup> 延<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup> 於<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup> 宜<sup>ニ</sup>ふ依<sup>テ</sup>。再<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>も出  
阿<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup> 伊<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup> 宇<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup> 延<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup> 於<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup> し。扱<sup>ル</sup>。是<sup>レ</sup>章<sup>ノ</sup>。第<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>段<sup>ノ</sup>宇<sup>ヲ</sup>  
阿<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup> 伊<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup> 宇<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup> 延<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup> 於<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup> 其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>央<sup>ニ</sup>位<sup>ニ</sup>して。其<sup>ノ</sup>  
阿<sup>レ</sup>呂<sup>ヲ</sup> 伊<sup>レ</sup>呂<sup>ヲ</sup> 宇<sup>レ</sup>呂<sup>ヲ</sup> 延<sup>レ</sup>呂<sup>ヲ</sup> 於<sup>レ</sup>呂<sup>ヲ</sup> 豎<sup>ニ</sup>横<sup>ニ</sup>はと斜<sup>ニ</sup>貫<sup>ス</sup>通<sup>ス</sup>去<sup>ル</sup>  
れり。所以<sup>ニ</sup>を。抑<sup>ス</sup>。是<sup>レ</sup>二<sup>五</sup>言<sup>ヲ</sup>。宇<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup>と起<sup>メ</sup>。潤<sup>ノ</sup>の義<sup>ヲ</sup>ふし  
心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>居<sup>ル</sup>。抑<sup>ス</sup>。是<sup>レ</sup>二<sup>五</sup>言<sup>ヲ</sup>。宇<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup>と起<sup>メ</sup>。潤<sup>ノ</sup>の義<sup>ヲ</sup>ふし  
て。宇<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup>。宇<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup>。宇<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup>。宇<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup>。宇<sup>レ</sup>呂<sup>ヲ</sup>を活<sup>カ</sup>るるが。宇<sup>レ</sup>良<sup>ヲ</sup>を阿<sup>レ</sup>と約<sup>ス</sup>て。  
初<sup>ニ</sup>段<sup>ヲ</sup>居<sup>ル</sup>。宇<sup>レ</sup>理<sup>ヲ</sup>を伊<sup>レ</sup>と約<sup>ス</sup>て。二<sup>ニ</sup>段<sup>ヲ</sup>居<sup>ル</sup>。宇<sup>レ</sup>流<sup>ヲ</sup>を宇<sup>レ</sup>と締<sup>ス</sup>



正て。二段ル居於支。宇禮を延と約めて。四段了成り。宇呂は  
於を約めて。五段ル居也。再各々ル。良行の五聲相副ひて。現  
入。潤得卸此義を成して。此義於ひふ。阿良此二行分まよ  
ゆ。二行分はとハ。一度然る五義を成せるとゆ。阿行ふも  
良行ふも。自然此五義の具れる哉。謂ふ。阿行ふ右の五義  
彼條云牙れ。此所ふ。加くて其初聲此良也。も。現と  
良行の事を專と謂ふ。加くて其初聲此良也。も。現と  
ゆ起れる。現の本義を彼等も。何ふは。等と云は。ゆ。  
諦ふ見留とる言れる故。良行を第四段まで。總て有在二  
字此義を持とゆ。是を以て万葉集ふ。ラ。リ。ル。レ。此詞了。多々  
此二字を用ひる也。其才三卷。高有之。二。大雪落有一。念有我母三。思有者四。相在登母三。

よ。立。在。松。樹。あ。ど。有。る。是。は。て。あ。ふ。数。多。あり。万。葉。け。て。良。を  
あ。ら。ぬ。て。神。代。紀。の。淨。者。在。と。ある。在。も。是。れ。ゆ。  
阿。良。の。省。語。ふ。て。等。此。義。ある。由。也。神。代。紀。の。吾。等。所。造。之。因。  
ま。と。是。出。雲。臣。等。祖。也。は。と。此。隼。人。等。始。祖。也。れ。ど。數。見。え。古  
事。記。も。同。じ。趣。り。用。ひ。万。葉。一。の。海。處。女。等。之。三。の。相。見。之。兒  
等。羽。裳。れ。ど。數。多。字。都。て。は。の。を。賤。し。む。方。也。用。ふる。言。れ。ゆ。  
其。と。同。じ。神。典。も。尊。む。上。ふ。と。同。じ。等。字。の。ら。ハ。百。万。  
神。等。は。と。海。神。等。れ。ど。み。あ。タ。チ。と。訓。と。ゆ。は。と。是。等。字。は。ト  
モ。と。訓。る。所。も。多。の。ゆ。此。と。殊。り。賤。む。言。あり。は。と。万。葉。の  
て。も。一。卷。の。朝。布。麻。須。等。六。卷。の。定。異。等。釋。れ。ど。有。る。を。訓  
字。借。り。て。假。字。ふ。抑。是。行。此。音。ど。も。都。て。言。語。の。上。よ。用。ふ。こ。せ  
用。ひ。ある。れ。り。抑。是。行。此。音。ど。も。都。て。言。語。の。上。よ。用。ふ。こ。せ  
無。支。ハ。舌。音。と。い。ふ。中。ふ。も。多。那。の。二。行。了。比。る。て。は。其。聲。陋  
ま。く。舌。頭。い。や。冗。息。しく。振。動。死。て。弄。舌。此。趣。れ。る。が。其。機。也

甚博く良を彼久く良く須く良く都く良く奴く良く布く  
良く年く良くれどの形容言はと良加良志良年れど想像  
の詞も何ふも此をれく活と音をハ爲れ也。契冲の正濫抄に良を舌  
音の至極あり舌此端を巻て多那をりも猶齟をわとく彈  
じて云はる餘の舌音を舌を下齒に著ても云るは是を  
云まじと云ひ士清此言ふ良を等をむ吾等幾等あは等  
こち等そち等れど下はあて云詞はてはと恋しら他し  
ら物ら思ひら湊ら夜ら宵られども詠也あは語末の助け  
よ云ふも有りはとあど云辞れや云辞よも通ひて聞  
めと云牙りもと弄舌の陋しは色ある故其を良れ一聲は  
みふ非交理流禮の活れを殊ふ繁く常此言語を更ふり事  
を記はふも一行も此三聲は出ざる行のふれが如し然る  
ふ唯呂聲はみ用ふ言は少れ也例の離れて助とは音れる

が故あり。其を既お葉ふも呂戎助語よ云は尾を戎ろと云  
とろ兄をせろ妹をいもろ家をいろろ兒をあらを云ふ類  
あり何せろ加せろ戎坂東詞ありと云ふ東國にて見ると  
云こと戎見ろ聞けを云ふと戎きけろけて此行の五聲  
置くあや戎れらろと云ふを云ふが如しけて此行の五聲  
此言は上ふ無しと云こを今し誰も知て謂ふ事れるが  
其を言ふこを無けれ謂ゆる在音之内在言之外と言れる  
詞は上ふ呂戎除きて餘りは四聲これ専用は聲ふふも  
有る其をばり同行相從ふ良流良禮の所字は義よて被  
見をも訓と加行は従ふ良加良伎は如然爾乎れどの義れ  
る佐行の従ふ良志良須良世は想像は詞はと敬ひ詞れる  
る更あり。良加良伎を明らう疼ら死等は類ある形容詞み  
ふ上件の字等の意あり良志良須良世は坐良志

須け奉ら良ら世ら那らどの類を謂ふあり。多タ行タ比タ從タふ。良ラ知ラ。良ラ都ラ。那ナ行ナの從レふ。良ラ那ナ。良ラ爾ニ。良ラ禰ニ。波ハ行ハの從レふ。良ラ比ヒ。良ラ布フ。良ラ閉ヒ。麻マ行マ比ヒ從レふ。良ラ麻マ。良ラ美ミ。良ラ牟ム。良ラ米メ。夜ヤ行ヤ比ヒ從レふ。良ラ由ユ。良ラ曳エれど。みふ言コトよ非ヒ交コト詞コトあるを以て知る法ハし。谷川氏云。良久を老らく。恋ら類あり。良久の反し留詞の緩急なり。良須を下飛委渡らる。れど是あり。良須の反し流あり。良比ハ程らひ中らひおど云。れ布らひを直會直相れど書ゆ類。てあひの轉あるを。良牟は疑の詞あり。良米を助語云。り。袖をひおらめ此説をも思合はるし。

○古言清濁説第八

古言清濁此事は。ま於語意考ふ。清濁字相通はしいふ例。と標して。其説。五十聯音比中ナカ。加カ伎キ久ク祁キ古コを。賀ガ藝キ具グ宜ゲ基ゴと

濁ダ巴バ。佐サ斯シ須ス世セ曾ソを。邪ジャ自ジ受ゼ是ゼ叙ゾ也ヤ濁ダり。多タ知チ都ト氏シ登ト字ジ陀ダ治チ豆ヅ傳デ杼ドと濁ダ巴バ。波ハ比ヒ布フ閉ヒ保ホを。婆バ備ビ夫フ辨ベ煩フ也ヤ濁ダ依イ。此コノ二十音比み濁りあり。其清むと濁るを言比本別あり。然れ尤是を合せて七十音れ巴。篤胤云。清むと濁るハ言の本別あり。とは下ル委。清濁比言は古事記日本紀。そ此外古書比訓注。く云。云。濁言尔也。濁字を寫るを見て知るし。はと濁言ふも。清音の字を寫し所を有れど。清言尔濁音比字を寫ことハ取し。万あどハ千ダ一。その違ひ有るを。かくて万ダの言ふ。本をり後。よ字を誤巴し。取。改むるを。加くて万ダの言ふ。本をり濁依何れ。言便の濁あり。其本とり濁る残也。通はし轉し延約むるも。同じく濁るれ巴。言便の濁るハ易ら。然れども。

通はしれどして云も本同音なれば。自然のら通をし轉し  
ても。言便の濁る多し。言便の濁りハ二言をいひ連くる時  
ど此類を彼此を並ぶ云ふ故に濁る事。海山河我人  
之を畧きてやまぐハを云ふ。川の濁る浦之川の  
人字浦人山人といふ時。ひを濁るは皆あり。ま  
風をも山風をいふ。此れ下ふぜの濁り有れば。山  
加茂濁らば。此類も有る。凡言便此濁りて。心  
事。年経おこし。心を用ひざれ。叶そ。然る。平言ハ  
加ら。此言便の清濁り。誤依は希あり。仍て平言ハ  
て思ひ知る。意の言も。平言ハ古言多し。古書ハ  
此。古言雅言を有りと。思ふ事あり。然心得。古書ハ  
言を通。知てのち。平言ハ心字置き心得。方け足あむ  
ぢぐ中。本をり清を濁る也。却て相通ふ例あり。殊に此清  
濁の通ふ言は事ハ。後世ふ傳牙云る人あ。加此日の入る  
因此音傳へしてふ人も。心得ざれむ左ふ舉ぐ。篤胤云上件  
の事ども師

の漢字三音考。皇國正音の條。古言の正音ハ。都て五十あ  
ゆ。是ハカ行サ行タ行ハ行の濁音。合せて二十を加ふれむ。  
都て七十あれども。濁音を多く。清音の変ふして。本をり別  
ある者ハ非る故。皇國此正音ハ。是を別ハ立。清音  
ハ撮る者ハ。一音の言ハ濁る例あ。はと二音三音を  
合せ。依言ハも。首を濁る例あ。凡て濁るも。其中下ハ  
のみ有り。然る。上。他。言を連。合。せ。云。む。首。を。も  
濁ること多し。月を。望。月。あ。と。云。む。首。を。も  
も。谷。川。あ。と。云。む。首。を。も。合。せ。て。心。得。を。し。○婆備夫辨煩の濁  
し。と云れ。とる。茂。も。合。せ。て。心。得。を。し。○婆備夫辨煩の濁  
音。茂。却。て。麻。美。牟。米。毛。の。清。音。も。て。云。む。神。奈。備。を。神。奈。美。加  
夫。利。茂。加。武。利。須。倍。良。藝。を。須。米。良。藝。比。煩。字。比。母。れ。と。相。通  
は。し。い。ふ。數。字。知。ら。ぬ。○陀。治。豆。傳。杼。も。は。と。那。邇。奴。禰。能。尔  
通。ま。り。加。太。志。と。加。奈。志。金。作。あり。金。倍。太。知。と。閉。奈。里。隔。を  
よ。と。多。治。比。を。丹。比。と。も。書。く。ハ。多。爾。ふ。通。ふ。故。あり。但。馬。丹  
免。り。



が事ぞ。雅言とて古言を本と取りて今も傳へて云へる。正  
ら誤りといふ言をいふ。平言とハ常といふ言をて然し如の  
ゆ轉しはと侘圀の言と相交り云ふ。如とを云ふ。まこと古事  
記日本紀。その外に古書を訓むハ。皆雅言哉用ふる支了。  
今此訓ふハ平言も交まゆ。此記ふ多くハ古書の書る例を  
るも皆を正所有る。然り見む人思ふ。まことゆ所を奉るも  
一。二。抄の之奉てや。然れむ。此故よし。此よ限まりと  
思ふ。○篤胤云。上件に考説はことハ大略言に足は然事  
ふ。有るれど。今し古語に學びよ從ふ徒ら。誰うもかく  
足は然誨とゆ。出さぬ者有らむ。當昔世よ有ける學ゆり  
を想ふ。余を却りて。此足ハ然誨字こそ。尊しやハ思ふ。  
然るを我のみ。とし次く。其缺を補ふべ支。謂ゆる青き藍

とゆ出。藍とゆ青き説を成はとも。其これ宇斯の。は依  
恩頼。因る事あれば。我黨に小子。志はしも。此事。勿  
忘れ。そと。鈴屋。宇斯。此御蔭。と言はくも。更あり。然るを今世  
ら。大抵。生あがら。其則を。知とり。是考の。事あど。取立  
て。稱ひ。出依。人も。あく。適り。見る。人。何る。も。甚は。う。れ。支。物。了  
云。く。あ。し。然。る。足。は。然。事。を。し。嘔。ル。り。呼。は。る。倫。も。有。る。を。其  
教。子。の。廣。く。及。ぶ。る。驗。あ。れ。た。宇。斯。の。聖。の。天。翔。也。い。う。ふ。本  
懐。入。る。事。正。喜。が。久。保。之。取。蛇。尾。と。云。物。り。細。川。玄。旨。翁。い。た  
波。入。く。執。心。し。て。工。夫。を。取。し。不。審。を。晴。さ。む。と。思。ふ。バ。愚。あ  
く。身。あ。れ。ど。も。偶。然。と。き。説。字。見。出。は。る。の。あり。然。あ。り。古。人  
古。人。子。勝。ゆ。と。智。慧。を。非。交。只。今。辨。知。する。事。も。先。古。人  
比。荒。ご。な。し。て。置。ま。し。上。り。付。て。出。來。る。義。あり。古。賢。の  
恩。徳。ま。あ。ら。び。と。云。ふ。事。然。し。と。誠。り。書。を。見。る。人。第。一。此。心  
得。あ。る。を。有。る。云。ふ。其。然。る。言。あり。語。意。考。ふ。と。誠。ふ。荒。ご  
れ。し。は。有。る。れ。云。ふ。其。然。る。言。あり。語。意。考。ふ。と。誠。ふ。荒。ご  
も。如。此。ば。有。る。の。説。を。も。荷。ひ。出。は。る。死。抑。古。言。清。濁。に。事。

まと古昔イニレハの假字カナ用格ツカヒはこぞオハ已レグ思ふ旨オハ也。古事記傳説コト了  
 本モト抄テ支テて。既モ古史コシ徵シ開題記カイトキ了レ著シせれど。尚ナホ言コト足タらズ交オホ所ホ思ユ  
 る事コトも有レれド復タテ更サ了レ此コトも云ヒてモむ。其コト開題記カイトキ也。故コトあり  
工彫キ工コをテ旁カ了レれテ支テて。草稿コウカウあるコト小コト從ヒて。卒ソク爾ニ思ヒ立チち。筆ヒツ  
先て。半ハ年ネンばウゆキ甚シ急キウがハしク物モノせシるバ。今イマ見ミるコトふコト言コト  
足らズ。悔クハ思ヒはル事コトも有レれドれド。然シるコト其コト師シ説ト了レ。假字用  
 格カクのコト也。大オホのコト天曆テンリキは頃キョウとモゆ。以テ往オホの書シヤ等トハ。皆ミナ正タ志シくシ  
 て。伊イ章シヤウ延エン惠ヱ於オ袁ヱン此コト音オンはト下シモ小連コネをテる。波ハ比ヒ布フ閉ヘ本ホンと。阿ア伊イ  
 宇ウ延エン於オ和ワ章シヤウ宇ウ惠ヱ袁ヱンとノ類ルイ。こノおれ誤サマシ正タとスるコト也。一ツもオちシ。  
 其コトをテみテ。恒コト了レ口コトふコトいコトふ語ゴ乃コト音オンふ。差別サバビ有レるコトはレ。物モノふ書カキ  
 小コトも。自オノ抄テのラ其コト假字カナの差別サバビ有レるコトはレ。依ヨちシるコト也。篤胤トクネ云ヒ此コト早  
く語意ゴイ考カウるコト也。

古事記コトシキ日本紀ニッポンキ万葉マンヤフその外ソノの古書コキヤの假字カナ均ヒトくシて。新ニ撰セン字ジ  
 鏡キョウ和ワ名ナ抄セウまで。惣ソウて異イふコトらズ。其コト和ワ名ナ抄セウをテりテ後ノチに漸シみシむコトが  
 こトと出来キて。遂スにシて。濫ランふコト成ナりシ。古コ書シヤをテりテ見ミるコト人ヒト無クれ  
 ぶ。正マサにシて。人ヒトもシ。難ナ支シをテ此コトふコトは。初ハジメにシて。字ジの音オンもシ。其コト書シヤとシて。小コト異イ  
 斯スて。御ミ時トキまで。四シ十六ジュウロクの御ミ世セにシて。輕嶋ケイジマ明アキラ宮ミヤ也。和ワ名ナ抄セウ字ジ書シヤしテ承シヤウ  
 平ヘイ其コト間マ世セの中ナカにシて。事コトハ。少シウ少シウの御ミ世セにシて。六ロク百ヒャク七シチ十ジュウ年ネンばウりシ。  
 傳デン牙ガて。盛セイあるコト代タテにシて。皆ミナ同ドウじニ音オン同ドウじニ假字カナありシ。とモ。猶ナホ上ウヘ代タテをテ  
 万マンの事コト失シはレて。古コ意イ古コ言ゴンもシ。然シるコトを。語ゴ比ヒ音オンふコト。古コもシ。差  
 別サベハ。無クレド。假字カナ比ヒ上ウヘふコト。書シヤ分ブンとスるコト耳ミミあリとシ思ヒふ  
 也。甚シにシて。非ヒありシ。もシ語ゴの聲セイにシて。差別サバビなきコトハ。何ナニもシて。加  
 へテ。假字カナをテ書シヤ分ブンとスるコト也。此コト有ル也。我ガれウみシ。此コト書シヤとシて。彼カ書シヤ也。假字  
 の違チガへルことナシして。皆ミナ自オノ抄テのラ小コト同ドウじニきレ。故コト以テてモ。語ゴ音オン

素とゆ差別あてし事を知る。斯て中昔とて、漸了右の  
れら物不書ふ其別ありて、音ども各乱れて、一ッ成  
假字ありて、其無用ある如く、成れりなるを、其後  
了京極中納言定家卿歌書の假字、初らひを定めらる是を  
り世に假字、初らひと云、こと始まり然れども、當時既  
人の語、音別らば、古書に依らば、心も定然れ、其  
る故、其假字、初らひ、古の格とハ、甚く異あり、然る其  
後、此歌人の思、初らひ、古の格とハ、假字の差別無也、我唯彼卿  
あむ、始めて定め給ふ、思ふ、初らひ、ハ、近世に至る、其  
ど音の輕重を以て、辨ふ、初らひ、ハ、契沖といひ、僧ぞ、古  
古を知らぬ、妄言あり、初らひ、ハ、難波の正し、加て、事、ハ、始  
書を、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
開、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
とき、功、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
記と書紀、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
ま、と、殊、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始

古書に假字用格、此事、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
きれきとも、仍、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
あ、正、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
ふも、自、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
ひ、難、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
後、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
正、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
と、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
ゆ、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
を、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始  
て、初らひ、考す、古の假字、初らひ、ハ、此法師を、初らひ、加て、事、ハ、始



ふ。漸くは轉マ訛シれる事と所思オボユはあア。其キといと古くも訛シ紀を始ハジ免メ古書どもふ。本ホ云ク某ノ今イマ訛シ云ク某ノと云フる事コトの多シ文ヲを思フふルは是レやクて乱レき誤ルゆヘる語ヲあるをモやシ然レれトハハ平ヲ工ヲオノ音ヲまシ下ニ連ルるハハフヘホトアイウエオノ事ヲ互ニ混シまシ訛レれる然レ依ルふ天曆ヲをモ以テ往ノ古書ども彼書と此書と假字ヲおウひ違ハはズ大加ト同シ趣セふ正志ニ文故ト。まカ古事記書紀ノ如ク古ノ本ノ有テ記セる書ハ。其キ本ノ書ハ假字ヲ用フ格ヲ據リ然ラ然レ餘リ事ヲ記セるハハ彼舊辭ノ書等ふ本ノ扱マて書スる故ニ正志ニあハる也。舊辭ハ書等ノ皇ノ御世以前をゆいと舊ク有來し辭書どもある事と既ル云フる如古ノ如ク中昔までも物書不どノ人々今ハが徒も以て記せる事と疑ヒ無キ物ありけテ人ハ口ハいふ所也。

外ウツク國ノの轉マ言ハふも率シて扱マて。彌降ニ亂レき來テ扱マども其辭書どももモ。言語ハ正シの也間ハ記セる書ヲ次ニふ記スる也。扱マる書ハ正シ故ニ其ノ據リて書ハ依ルぬ也。彼レ此レ々々符ハひて正シる依ルべク也謂フあり。其ノ書トる書ノ假字ヲ扱マるハ正シきみハあカくノ如ク正シかリはト師モ縣居ノ宇斯モ和名抄ノ成レる當時ノまでモ世人ハ口ハいふ音ノ正シかリ也。其ノ後亂レまシ依ル趣ヲ云レる也。彼抄ハ假字ハ正志ニあハる也。其ノ後抄ハ書ハ多ク也ヲ以テ云レる事あレど彼抄ノ正シ死ハ。即チ古ノ也辭書ハ採リて記セる故あり。其ノ序文ハ延長ノ第四ノ聞ル思フ拾テ者ハ好ク探ル義實ノ期ヲ折テ桂ノ者ハ競テ採ル文ヲ花ニ至ス于テ倭名ノ棄テ而シ不レ屑ス是故ニ難ク決ス世俗ノ之ノ疑ニ適シ可ク決ス其ノ疑者辨色立成楊氏漢語抄

和名本草日本紀私記等也其餘漢語抄不知何人撰汝集彼  
數家之善說令我臨文無所疑焉固辭不許遂用修撰或漢語  
抄之文或流俗人說先舉本文正說各附出於其注若其本文  
未詳則直舉辨色立成楊氏漢語抄日本紀私記或本類聚固  
史万葉集三代式等所用之假字云々と有るは著明然れ  
あり和名抄の事あ不開題記ふ委く論牙依を見ゆし然れ  
を順朝臣の當昔延曆は頃既し世人は倭名字屑とせは適  
し心あるも古語ふ惑ひの有しを以て其以前をも想ひ遣  
るぞくはと一箇は書ふを非交て其頃の人已ははくふ  
書と依手澤も多く傳はれるふ假字違ひは交れるは以て  
も思ひ辨ふる最上れ世とゆ漸に亂を來りてかく  
成たるこや疑ふく延長第四公主は御教しは任し順朝臣  
の此抄を撰びて古言を訂されあるを訛言ふ轉はせじや

方域了關居と依如支美地有功ふそ然れむ昔より心あ  
ゆて物とみせる人も有故まど深くも勘牙交並て此抄子と  
かるる開の有とを知らば溢れりあふまを訛言ふ訛りて遂  
に上件宇斯とち此論をれとる如くれも成れり然る  
を今く古学の眞盛とあるをき時ふあひて神語の本辞  
字も探知る成然るハ然れど此抄を更なり其餘の古  
甚み辱あき事れりかし書ふもイ平工卫オヲは音まよ其餘の音ふも互に通ひ字  
訛きゆと所思ゆる事も往くと無ふ非交そを本編まよ  
古史傳ふ然依語の出たる所く云哉見るは然るを世  
の倫たる事此由を深くも思はで書來れる假字ふれみ  
泥して古言を釈むとゆる故了解得ざる語も多あり元と  
り古言を古書の假字ふとゆる釈得る事を常あれども謂  
ゆる變ふとゆる正を索むる旨哉もよと思ふるくこ哉  
抑天曆とゆ以往の古書ふ往く假字は違ひも有こやは當

昔いまだ。其後此如くハ。言語此道の亂れざりし故。却て  
て今世古學此徒の如く。舊辭此書も正し敢て。之れ  
無く誤れり。と見ゆる。ぬ多く。はと其を次く。不寫し誤り。以  
來。尔む。む。思。ゆ。依。事。も。有。ふ。れ。ど。其。心。し。て。見。る。を。然。る  
か。の。一。編。ある。倫。た。慥。き。古。書。を。見。て。も。假。字。の。違。ど。有  
れ。た。當。時。の。物。あ。ら。び。と。捨。て。取。ぎ。る。を。見。識。と。云。る。も。有。れ  
ど。然。る。假。字。此。違。牙。の。書。も。外。不。比。を。見。て。眞。偽。を。正。し。得。べ  
き。事。の。何。を。思。ひ。慮。ら。ざ。る。よ。て。最。も。何。あ。き。無。支。わ。け。ふ  
そ。ち。て。古。言。清。濁。の。事。は。ま。於。上。り。出。せる。語。意。考。此。文。り。其  
清。む。と。濁。依。ハ。言。此。本。別。あり。と。有。れ。ど。此。を。別。ふ。は。非。也。其  
本。を。同。言。れ。る。が。清。輕。と。濁。重。也。音。二。於。り。岐。ま。て。其。義。の。轉  
易。む。る。耳。あり。但。し。は。と。元。より。清。音。の。言。れ。る。が。言。便。り。と  
り。て。濁。れ。る。も。有。る。た。今。云。ふ。と。ハ。異。あり。其

由。是。下。論。其。を。殊。不。近。支。一。事。を。舉。げ。て。論。は。む。る。天。地。初  
ふ。を。見。べ。し。發。此。古。傳。尔。如。葦。牙。因。萌。騰。之。物。而。と。有。依。た。其。物。を。葦。牙。此  
如。く。也。譬。へ。し。故。り。毛。延。阿。加。理。り。萌。騰。の。字。を。填。於。ま。ど。姑  
く。葦。牙。の。譬。を。忘。ま。萌。騰。此。字。也。故。ま。太。古。此。言。の。み。あり  
し。世。不。心。字。回。ら。し。て。熟。く。尔。是。を。惟。牙。ハ。其。毛。延。阿。加。理。し  
物。を。天。日。此。初。あり。燃。然。く。萌。え。明。也。於。騰。れ。る。傳。尔。て。  
其。清。濁。を。言。此。輕。重。れ。る。也。也。著。明。也。此。言。此。義。委。く。ハ。本  
此。を。く。不。は。例。り。そ。然。れ。ど。燃。萌。共。り。毛。延。毛。由。と。い。ふ。言  
の。大。意。を。云。る。れ。り。此。同。支。を。更。あり。明。を。阿。加。理。騰。字。阿。賀。理。と。訓。む。も。清。濁。不  
拘。は。ら。不。同。言。れ。る。こ。を。論。ひ。ふ。し。其。を。是。燃。明。萌。騰。の。み。尔

非<sup>レ</sup>假字<sup>ニ</sup>同<sup>シ</sup>死<sup>ス</sup>千言萬語<sup>ヲ</sup>の填<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>よ<sup>ク</sup>其清濁<sup>ヲ</sup>易<sup>カ</sup>  
るとも<sup>ニ</sup>皆<sup>シ</sup>同言<sup>ノ</sup>の轉用<sup>アル</sup>グ<sup>ニ</sup>唯<sup>ク</sup>清<sup>ヲ</sup>本<sup>ニ</sup>お<sup>し</sup>て輕<sup>ク</sup>濁<sup>ハ</sup>  
末<sup>ニ</sup>お<sup>し</sup>て重<sup>ク</sup>死<sup>ス</sup>こ<sup>ト</sup>准<sup>テ</sup>知<sup>ラ</sup>ズ<sup>キ</sup>れ<sup>ル</sup>也<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>是<sup>ヲ</sup>を<sup>モ</sup>て<sup>此</sup>書<sup>ノ</sup>本<sup>編</sup>  
古言<sup>ヲ</sup>を<sup>綴</sup>こと<sup>皆</sup>この<sup>意</sup>を<sup>れ</sup>して<sup>説</sup>を<sup>編</sup>ま<sup>と</sup>古<sup>史</sup>傳<sup>と</sup>も<sup>不</sup>  
成<sup>セ</sup>れ<sup>見</sup>む<sup>人</sup>異<sup>し</sup>み<sup>誦</sup>うる<sup>事</sup>あり<sup>れ</sup>け<sup>ち</sup>て<sup>古</sup>事<sup>記</sup>傳<sup>ヲ</sup>古<sup>書</sup>  
書<sup>ニ</sup>假<sup>カ</sup>字<sup>ナ</sup>用<sup>グ</sup>格<sup>ヒ</sup>の<sup>正</sup>し<sup>死</sup>中<sup>ニ</sup>も<sup>此</sup>記<sup>ノ</sup>の<sup>正</sup>し<sup>死</sup>由<sup>ヲ</sup>を<sup>誨</sup>され<sup>ル</sup>  
ある<sup>次</sup>り<sup>ま</sup>お<sup>し</sup>て<sup>續</sup>紀<sup>と</sup>り<sup>以</sup>來<sup>ノ</sup>の<sup>書</sup>等<sup>ニ</sup>假<sup>カ</sup>字<sup>ヲ</sup>清<sup>濁</sup>分<sup>カ</sup>ま<sup>レ</sup>  
濁言<sup>ノ</sup>の<sup>所</sup>不<sup>レ</sup>清音<sup>ノ</sup>假字<sup>ヲ</sup>用<sup>ヒ</sup>と<sup>依</sup>耳<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>清</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>所</sup>不<sup>レ</sup>濁  
音<sup>ニ</sup>此<sup>字</sup>を<sup>も</sup>交<sup>テ</sup>用<sup>ヒ</sup>ま<sup>と</sup>音<sup>と</sup>訓<sup>を</sup>殘<sup>シ</sup>雜<sup>テ</sup>用<sup>ヒ</sup>と<sup>る</sup>を<sup>此</sup>記  
書<sup>紀</sup>万<sup>葉</sup>ハ<sup>清</sup>濁<sup>ヲ</sup>を<sup>分</sup>て<sup>レ</sup>也<sup>然</sup>ま<sup>ど</sup>此<sup>事</sup>不<sup>レ</sup>就<sup>テ</sup>お<sup>不</sup>人<sup>レ</sup>疑  
ふ<sup>事</sup>あり<sup>今</sup>委<sup>曲</sup>不<sup>レ</sup>辨<sup>テ</sup>む<sup>其</sup>を<sup>は</sup>お<sup>し</sup>て<sup>後</sup>世<sup>ハ</sup>濁<sup>依</sup>言<sup>殘</sup>古<sup>ハ</sup>

は清<sup>ス</sup>て云<sup>ハ</sup>るも多<sup>ク</sup>と見<sup>エ</sup>て山<sup>レ</sup>枕<sup>詞</sup>のあ<sup>し</sup>ひ<sup>き</sup>ま<sup>と</sup>宮  
人<sup>レ</sup>れ<sup>ど</sup>此<sup>ヒ</sup>嶋<sup>於</sup>鳥<sup>家</sup>於<sup>鳥</sup>れ<sup>ど</sup>の<sup>ト</sup>此<sup>レ</sup>類<sup>ハ</sup>古<sup>書</sup>等<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>  
ま<sup>も</sup>清<sup>音</sup>此<sup>假</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>の</sup>み<sup>用</sup>ひ<sup>て</sup>濁<sup>音</sup>此<sup>假</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>の</sup>み<sup>用</sup>ひ<sup>多</sup>る  
多<sup>ク</sup>ま<sup>と</sup>後<sup>世</sup>不<sup>レ</sup>清<sup>ム</sup>言<sup>ハ</sup>濁<sup>音</sup>此<sup>假</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>の</sup>み<sup>用</sup>ひ<sup>多</sup>る  
め<sup>多</sup>し<sup>是</sup>ら<sup>ハ</sup>假<sup>字</sup>お<sup>し</sup>ひ<sup>レ</sup>漫<sup>ル</sup>る<sup>不</sup>レ<sup>非</sup>也<sup>古</sup>と<sup>後</sup>世<sup>と</sup>  
言<sup>ノ</sup>の<sup>清</sup>濁<sup>乃</sup>變<sup>ル</sup>る<sup>を</sup>ま<sup>バ</sup>今<sup>レ</sup>此<sup>心</sup>殘<sup>以</sup>て<sup>也</sup>と<sup>り</sup>無<sup>ク</sup>疑<sup>ハ</sup>  
不<sup>レ</sup>き<sup>不</sup>レ<sup>非</sup>也<sup>ま</sup>と<sup>其</sup>外<sup>ハ</sup>言<sup>ノ</sup>の<sup>首</sup>れ<sup>ど</sup>決<sup>テ</sup>清<sup>音</sup>此<sup>假</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>の</sup>み<sup>用</sup>ひ<sup>と</sup>る<sup>事</sup>も<sup>い</sup>と<sup>希</sup>不<sup>レ</sup>  
た<sup>あ</sup>る<sup>ハ</sup>自<sup>ら</sup>お<sup>し</sup>ら<sup>取</sup>は<sup>お</sup>して<sup>誤</sup>れ<sup>る</sup>も<sup>有</sup>る<sup>ま</sup>と<sup>後</sup>世<sup>に</sup>  
寫<sup>シ</sup>誤<sup>レ</sup>れる<sup>も</sup>有<sup>ベ</sup>し<sup>け</sup>れ<sup>ど</sup>古<sup>事</sup>記<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>殊<sup>ニ</sup>此<sup>違</sup>ひ<sup>を</sup>い  
と<sup>希</sup>不<sup>レ</sup>して<sup>惣</sup>て<sup>此</sup>中<sup>ニ</sup>お<sup>し</sup>て<sup>お</sup>し<sup>る</sup>ま<sup>と</sup>後<sup>世</sup>  
え<sup>ざ</sup>る<sup>其</sup>中<sup>ハ</sup>十<sup>ば</sup>り<sup>を</sup>婆<sup>字</sup>れ<sup>る</sup>を<sup>其</sup>八<sup>を</sup>一<sup>本</sup>不<sup>レ</sup>波  
を<sup>作</sup>る<sup>不</sup>レ<sup>あり</sup>二<sup>三</sup>の<sup>婆</sup>も<sup>も</sup>と<sup>ハ</sup>波<sup>あり</sup>し<sup>こと</sup>知<sup>ら</sup>れ  
と<sup>り</sup>然<sup>レ</sup>バ<sup>記</sup>中<sup>ハ</sup>さ<sup>し</sup>く<sup>清</sup>濁<sup>ノ</sup>違<sup>ハ</sup>り<sup>と</sup>見<sup>ゆ</sup>る<sup>不</sup>レ<sup>也</sup>

十ばりりふハ過びして其餘幾百クある清濁ハ之を正しく分れざる物多しと希ある方ハ亦た扱みて凡て疑ふべき事ハ是レ書紀ハ古事記ヲ比ぶれど清濁ハ違へる事いぞ多し此をいと不審し死事ハ然まどもはたと全くとこれを分と交着<sup>トシク</sup>用ひたる物ハ非交凡てを正とく分とまはバ加の後の全く着<sup>トシク</sup>用ひある書等ハ亦み非交よと万葉ハ古事記ヲ比ぶまバ違へる處も稍多けれども書紀ハ比ぶれど違ひはいと少と去て凡て清濁正しく用ひ分と依趣あり是らハ差別也その用ひたる假字ども尠一毎<sup>トシク</sup>ありはたらく考子合せて知は支事あり只大と扱<sup>トシク</sup>不見てハ委し死事也知<sup>トシク</sup>難<sup>トシク</sup>うるべき物ぞと何れ師<sup>トシク</sup>の是<sup>トシク</sup>論<sup>トシク</sup>子<sup>トシク</sup>ハと何れ志<sup>トシク</sup>を<sup>トシク</sup>た<sup>トシク</sup>こ<sup>トシク</sup>して<sup>トシク</sup>具<sup>トシク</sup>ふ<sup>トシク</sup>古

言の清濁ヲ考子著せる書也石塚龍麻呂<sup>トシク</sup>古言清濁考あり是はと見ばハ有<sup>トシク</sup>尠<sup>トシク</sup>くら交<sup>トシク</sup>篤胤<sup>トシク</sup>此師説<sup>トシク</sup>尔因ても亦按<sup>トシク</sup>ふ旨<sup>トシク</sup>あり其古事記ありて以來<sup>トシク</sup>の清濁也誠<sup>トシク</sup>子師説<sup>トシク</sup>此如<sup>トシク</sup>れど言語<sup>トシク</sup>此本<sup>トシク</sup>を云<sup>トシク</sup>や也<sup>トシク</sup>ハ上<sup>トシク</sup>云<sup>トシク</sup>ふ如<sup>トシク</sup>く清<sup>トシク</sup>依<sup>トシク</sup>グ本<sup>トシク</sup>あま<sup>トシク</sup>む上古<sup>トシク</sup>ハ決<sup>トシク</sup>めて斯<sup>トシク</sup>此<sup>トシク</sup>如<sup>トシク</sup>から交<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>る音<sup>トシク</sup>此言<sup>トシク</sup>をい<sup>トシク</sup>や少<sup>トシク</sup>くそ<sup>トシク</sup>此<sup>トシク</sup>元<sup>トシク</sup>と何<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>る音<sup>トシク</sup>を千万<sup>トシク</sup>言<sup>トシク</sup>此<sup>トシク</sup>中<sup>トシク</sup>ハ一<sup>トシク</sup>二<sup>トシク</sup>ありらで無<sup>トシク</sup>しを漸<sup>トシク</sup>く小<sup>トシク</sup>轉<sup>トシク</sup>用<sup>トシク</sup>多<sup>トシク</sup>く成<sup>トシク</sup>依<sup>トシク</sup>尔<sup>トシク</sup>從<sup>トシク</sup>ひま<sup>トシク</sup>と或<sup>トシク</sup>を言<sup>トシク</sup>便<sup>トシク</sup>尔<sup>トシク</sup>と何<sup>トシク</sup>或<sup>トシク</sup>外<sup>トシク</sup>國<sup>トシク</sup>言<sup>トシク</sup>尔<sup>トシク</sup>も相<sup>トシク</sup>率<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>れる<sup>トシク</sup>グ遂<sup>トシク</sup>も同<sup>トシク</sup>言<sup>トシク</sup>此<sup>トシク</sup>重<sup>トシク</sup>支<sup>トシク</sup>方<sup>トシク</sup>尔<sup>トシク</sup>い<sup>トシク</sup>ふ言<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>定<sup>トシク</sup>れる<sup>トシク</sup>物<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>所<sup>トシク</sup>思<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>其<sup>トシク</sup>一<sup>トシク</sup>二<sup>トシク</sup>於<sup>トシク</sup>元<sup>トシク</sup>と何<sup>トシク</sup>思<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>谷<sup>トシク</sup>川<sup>トシク</sup>氏<sup>トシク</sup>の言<sup>トシク</sup>清<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>ふと<sup>トシク</sup>りて永<sup>トシク</sup>炭<sup>トシク</sup>相<sup>トシク</sup>反<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>其<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>る<sup>トシク</sup>もの<sup>トシク</sup>あり譬<sup>トシク</sup>へば<sup>トシク</sup>み<sup>トシク</sup>し<sup>トシク</sup>ハ見<sup>トシク</sup>き<sup>トシク</sup>あり<sup>トシク</sup>レ<sup>トシク</sup>を<sup>トシク</sup>キ<sup>トシク</sup>と通<sup>トシク</sup>子<sup>トシク</sup>り<sup>トシク</sup>レ<sup>トシク</sup>を<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>れ<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>不<sup>トシク</sup>見<sup>トシク</sup>あり<sup>トシク</sup>ざ<sup>トシク</sup>り<sup>トシク</sup>レ<sup>トシク</sup>反<sup>トシク</sup>し<sup>トシク</sup>レ<sup>トシク</sup>ハ<sup>トシク</sup>見<sup>トシク</sup>る<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>不<sup>トシク</sup>見<sup>トシク</sup>あり<sup>トシク</sup>ざ<sup>トシク</sup>る<sup>トシク</sup>の<sup>トシク</sup>反<sup>トシク</sup>し<sup>トシク</sup>ズ<sup>トシク</sup>あり<sup>トシク</sup>みて<sup>トシク</sup>ハ<sup>トシク</sup>見<sup>トシク</sup>と<sup>トシク</sup>子<sup>トシク</sup>り<sup>トシク</sup>ス<sup>トシク</sup>也<sup>トシク</sup>濁<sup>トシク</sup>ま<sup>トシク</sup>バ<sup>トシク</sup>不<sup>トシク</sup>見<sup>トシク</sup>あり<sup>トシク</sup>ざ<sup>トシク</sup>る<sup>トシク</sup>の<sup>トシク</sup>反<sup>トシク</sup>し<sup>トシク</sup>ズ<sup>トシク</sup>あり<sup>トシク</sup>みて<sup>トシク</sup>ハ<sup>トシク</sup>見<sup>トシク</sup>と

れの急語ありたれの反しテありテを濁まバ不見ての義  
取れされ古今集此祔ても見ゆ祔でも見えたり此歌を  
下此祔でもは不寐の義と先輩も釈せられとまバて字濁  
正て讀ざれ通じぬとしは庭の雪ふ我が跡おれ出  
ぬしをとハれぬ狂歌や人に見るらむ此歌でまじはる  
我濁りてとハれぬ狂歌や人に見るらむ此歌でまじはる  
於更科やわは捨山うてる月字見て此歌もせまゆ此  
じを濁り唱ふる時を盲人の歌とぬると云ふが如く  
分別をなすも非祔む此等此類ひを元とゆ濁音ぬる  
云々くも非祔む此等此類ひを元とゆ濁音ぬる  
どれ布。奈良此頃までを彼人此清ていふ音を此人を濁り  
て云ひ。此人の清て云ふ言を彼人を濁りて云ひ。まと困小  
をゆ處ふを正ても言語の清濁一様あらざ古事記序よ。諸  
家之所費帝紀及本辭とあ依類の古書みあ。此書ふを清音  
ふ書と依言を彼書ふを濁音ふ書ふれど各々様々れりし

を。彼、勅語は舊辭り撰録せむ。せ有依大御言此如く。安麻侶、  
朝臣此心也。我の舊辭の正し此限りを擇びて。清濁を定ぬ。  
本書の假字成む。悉改免て一定ふ記れしれ也。其書紀續  
以來此書どもは更あり古事記より以前の書此適尔存れ  
る。聖徳法王帝説おどまると今傳はらぬ書どもを中世の書  
小引て見えたるも清濁の假字此互ふ異あるを何此意も  
取く濁音の処子清音此假字を用ひ清音子濁音の假字を  
清用とるも多りれど然此みふた非て清音も濁音も云ふ  
語お依故よ二様も書正と見ゆるも多り此を按ふ古  
事記撰録の時小安麻侶然し其本書の假字を改め書れと  
依こと明あり其を清濁の假字此みふ非て餘の假字未あ  
地名神名此書状本とも一様とて此子て佗書ども不  
伊佐奈伎命とも伊射那伎命とも種く小書とるを邪岐の  
濁音を定免てい於こまても伊邪那岐命と書れとる一を  
以ても准子知登し但しこまても伊邪那岐命と書れとる一を  
神田阿礼の口ふいひてし音をう於せるふて。けて足ひき。  
其やぐて譯ゆる。勅語の旧辭と云ふもの也。ゆ。けて足ひき。

宮人あど此ヒ。嶋於鳥家つ鳥れど此トの類を古書どもふ。  
何まも清音此假字を書依え。當時亦本是ら此言は。あぶて  
古音城失はげりし故ふり。ま後世も清む言ふ。濁音の假  
字をのみ用と依も多まハ。古と後世と。言此清濁此變まる  
也とあるも。古事記ふ限る事ふて。佗書ども皆然るる非  
也。凡て古語此本む。みあ清音れりし事。始繼水れど此レ  
キツは古書ルも多。濁音此假字を用ひ。今もあべて。濁  
りて云。終り。言此本を思牙バ。始端繼を付。水は満と同言  
ふれむ。甚古く。清音此言れりしを。後濁れること知る  
し。そは今も常陸人出羽人あど。始波志米水を美都とい  
ひ。次繼れどのキを清音ふいふ。固所もあり。はと端を常

も。由基主基の主基。やがて次字此義あるを清てスキセ唱  
て。清音れりこと。次此義ハ異れども。言の本を付と同言ふ  
意。れり。以て思ひ辨ふ。此の付く義。繼を彼を此の付く  
正し。ハ立し。氏を内れ。多ぐひ。凡て濁音ふいふ。此言の  
解。あ。此も。此清音。復して考ふる。解。然れ。縦牙古  
事記ふ出と。此とも。濁音此言をみあ。後ふ。志。神語の本語  
ルは非。ま。か。然。有れ。ど。今しも何。あ。め。せ。む。早。死。御。世  
と。め。あ。て。遠。長。り。か。く。定。ま。り。來。ぬ。る。事。ふ。し。有。れ。む。我。人。共  
了。古。事。記。以。來。の。清。濁。を。據。て。在。る。ぞ。即。か。此。勅。語。の。舊。辭  
ふ。從。ひ。奉。依。道。理。ふ。あ。も。有。り。依。然。有。れ。世。の。古。学。は。徒  
字。の。固。く。守。ら。ひ。彼。記。り。濁。音。の。假。字。を。書。依。言。を。本。と  
り。濁。れ。る。言。と。あ。て。清。音。此。言。れ。變。れ。る。由。を。辨。牙。比。其。を。清





